

Q001

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：基礎

鍼の構造の論点「鍼尖の名称」について、「鍼尖」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼尖は鍼体の先端に位置し、生体へ刺入される部分である。
- イ．鍼柄は施術者が把持・操作する部分である。
- ウ．鍼根は鍼体と鍼柄の境界部である。
- エ．鍼頭は鍼柄の末端部である。

答え・4肢解説

正答：ア．鍼尖は鍼体の先端に位置し、生体へ刺入される部分である。

ア：正しい。この説明が「鍼尖」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼根」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼頭」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼尖は鍼体の先端に位置し、生体へ刺入される部分である。鍼尖は鍼体の先端に位置し、生体へ刺入される部分である。

Q002

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：基礎

鍼の構造の論点「鍼体の機能」について、「鍼体」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼柄は把持して操作する部分である。
- イ．鍼体は鍼尖から鍼根までの細長い部分で、刺入される主体となる。
- ウ．鍼根は鍼体と鍼柄の接続部である。
- エ．鍼頭は鍼柄の後端に相当する。

答え・4肢解説

正答：イ．鍼体は鍼尖から鍼根までの細長い部分で、刺入される主体となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄」を評価するための説明であり、今回の「鍼体」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「鍼体」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼根」を評価するための説明であり、今回の「鍼体」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼頭」を評価するための説明であり、今回の「鍼体」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼体は鍼尖から鍼根までの細長い部分で、刺入される主体となる。鍼体は鍼尖から鍼根までの細長い部分で、刺入される主体となる。

Q003

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：基礎

鍼の構造の論点「鍼柄の役割」について、「鍼柄」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼尖は刺入される最先端部である。
- イ．鍼体は主に体内へ刺入される軸状部である。
- ウ．鍼柄は施術者が把持し、刺入や旋撚などの操作を加える部分である。
- エ．鍼根は鍼体と鍼柄の境界部である。

答え・4肢解説

正答：ウ．鍼柄は施術者が把持し、刺入や旋撚などの操作を加える部分である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼体」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「鍼柄」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼根」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼柄は施術者が把持し、刺入や旋撚などの操作を加える部分である。鍼柄は施術者が把持し、刺入や旋撚などの操作を加える部分である。

Q004

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：基礎

鍼の構造の論点「鍼根の位置」について、「鍼体と鍼柄との境界部に位置する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．最先端部は鍼尖である。
- イ．鍼柄の末端部は鍼頭である。
- ウ．鍼管は毫鍼とは別の刺鍼補助器具である。
- エ．鍼根は鍼体と鍼柄との境界、接続部に位置する。

答え・4肢解説

正答：エ．鍼根は鍼体と鍼柄との境界、接続部に位置する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖の最先端部を指す。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体と鍼柄との境界部に位置する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄の末端だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体と鍼柄との境界部に位置する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼管の先端部を指す。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体と鍼柄との境界部に位置する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「鍼体と鍼柄との境界部に位置する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：鍼根は鍼体と鍼柄との境界、接続部に位置する。鍼根は鍼体と鍼柄との境界、接続部に位置する。

Q005

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「鍼長と呼称」について、「「寸」は主として鍼体の長さを表す呼称に用いられる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．国内の鍼の規格では、寸・寸分などの呼称が鍼長の表示に用いられる。
- イ．「番」は主として鍼の太さを区別する呼称として用いられる。
- ウ．長さとは太さは別の規格要素である。
- エ．鍼長は刺入部となる鍼体の長さを基準に扱う。

答え・4肢解説

正答：ア．国内の鍼の規格では、寸・寸分などの呼称が鍼長の表示に用いられる。

ア：正しい。この説明が「「寸」は主として鍼体の長さを表す呼称に用いられる。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「「番」は鍼体の長さだけを表す。」を評価するための説明であり、今回の「「寸」は主として鍼体の長さを表す呼称に用いられる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼の長さとは太さは同一の番号だけで表す。」を評価するための説明であり、今回の「「寸」は主として鍼体の長さを表す呼称に用いられる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼長は鍼柄だけの長さで決まる。」を評価するための説明であり、今回の「「寸」は主として鍼体の長さを表す呼称に用いられる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：国内の鍼の規格では、寸・寸分などの呼称が鍼長の表示に用いられる。国内の鍼の規格では、寸・寸分などの呼称が鍼長の表示に用いられる。

Q006

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「鍼径と番数」について、「鍼体の直径が太くなる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼長は寸など別の呼称で区別される。
- イ．一般に番数は鍼体の太さを区別する表示に用いられ、番数が大きいほど太い規格となる。
- ウ．番数は鍼尖形状を示すものではない。
- エ．番数から鍼柄長が一義的に決まるわけではない。

答え・4肢解説

正答：イ．一般に番数は鍼体の太さを区別する表示に用いられ、番数が大きいほど太い規格となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼体の長さだけが長くなる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体の直径が太くなる。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「鍼体の直径が太くなる。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖が必ず丸くなる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体の直径が太くなる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄が必ず短くなる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼体の直径が太くなる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：一般に番数は鍼体の太さを区別する表示に用いられ、番数が大きいほど太い規格となる。一般に番数は鍼体の太さを区別する表示に用いられ、番数が大きいほど太い規格となる。

Q007

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「管鍼法の器具」について、「鍼管」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．灸筒は温熱刺激を与える灸法で用いられる器具である。
- イ．皮内鍼の固定には絆創膏等が用いられるが、管鍼法の切皮器具ではない。
- ウ．管鍼法では鍼管内に毫鍼を入れ、鍼管を皮膚上に固定して切皮を行う。
- エ．吸角は刺絡後の吸引などに関連する器具で、管鍼法の鍼管ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．管鍼法では鍼管内に毫鍼を入れ、鍼管を皮膚上に固定して切皮を行う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「灸筒」を評価するための説明であり、今回の「鍼管」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「皮内鍼絆創膏」を評価するための説明であり、今回の「鍼管」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「鍼管」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「刺絡用吸角」を評価するための説明であり、今回の「鍼管」を支持する根拠にはならない。

総合解説：管鍼法では鍼管内に毫鍼を入れ、鍼管を皮膚上に固定して切皮を行う。管鍼法では鍼管内に毫鍼を入れ、鍼管を皮膚上に固定して切皮を行う。

Q008

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「管鍼法と撚鍼法」について、「管鍼法では鍼管を利用して切皮する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．撚鍼法は鍼管を用いず、鍼を直接操作して刺入する方式である。
- イ．管鍼法でも鍼尖は切皮時に皮膚を通過する。
- ウ．撚鍼法は一般的な刺絡方式の一つであり、灸頭鍼に限定されない。
- エ．管鍼法は鍼管を皮膚に当て、その中の鍼を弾入して切皮する方式である。

答え・4肢解説

正答：エ．管鍼法は鍼管を皮膚に当て、その中の鍼を弾入して切皮する方式である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「撚鍼法では必ず鍼管を用いる。」を評価するための説明であり、今回の「管鍼法では鍼管を利用して切皮する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「管鍼法では鍼尖を皮膚に接触させない。」を評価するための説明であり、今回の「管鍼法では鍼管を利用して切皮する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「撚鍼法は灸頭鍼だけに用いる方法である。」を評価するための説明であり、今回の「管鍼法では鍼管を利用して切皮する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「管鍼法では鍼管を利用して切皮する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：管鍼法は鍼管を皮膚に当て、その中の鍼を弾入して切皮する方式である。管鍼法は鍼管を皮膚に当て、その中の鍼を弾入して切皮する方式である。

Q009

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「鍼尖の点検」について、「使用せず、新しい適切な鍼に交換する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．変形や損傷のある鍼は刺入抵抗や組織損傷、折損等の危険につながるため使用しない。
- イ．手指での修復は清潔性・安全性を保証できず、使用すべきでない。
- ウ．刺入速度で器具の欠陥を補うことはできない。
- エ．強い操作で変形を矯正しようとすると破損リスクを高める。

答え・4肢解説

正答：ア．変形や損傷のある鍼は刺入抵抗や組織損傷、折損等の危険につながるため使用しない。

ア：正しい。この説明が「使用せず、新しい適切な鍼に交換する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「変形部を指で伸ばしてそのまま使う。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず、新しい適切な鍼に交換する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「刺入速度を上げれば問題ない。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず、新しい適切な鍼に交換する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼管内で強く回転させてから使用する。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず、新しい適切な鍼に交換する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：変形や損傷のある鍼は刺入抵抗や組織損傷、折損等の危険につながるため使用しない。変形や損傷のある鍼は刺入抵抗や組織損傷、折損等の危険につながるため使用しない。

Q010

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：標準

鍼の構造の論点「操作部位の識別」について、「鍼柄」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼尖は体内へ刺入される先端であり操作部ではない。
- イ．旋撚などの鍼操作は、主として体外に残る鍼柄を把持して行う。
- ウ．刺入された鍼体を直接指でつまむことは清潔操作上も不適切である。
- エ．刺入後の旋撚操作は鍼管ではなく鍼柄を操作する。

答え・4肢解説

正答：イ．旋撚などの鍼操作は、主として体外に残る鍼柄を把持して行う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「鍼柄」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「刺入された鍼体中央部」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼管の外側だけ」を評価するための説明であり、今回の「鍼柄」を支持する根拠にはならない。

総合解説：旋撚などの鍼操作は、主として体外に残る鍼柄を把持して行う。旋撚などの鍼操作は、主として体外に残る鍼柄を把持して行う。

Q011

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：応用

鍼の構造の論点「使用前点検」について、「包装の印刷色が施術室の内装と調和しているか。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．包装の破損は無菌性が担保できない可能性があるため確認が重要である。
- イ．期限や製品表示の確認は適切な器具使用に必要である。
- ウ．包装の装飾色は安全性・無菌性の確認項目ではない。
- エ．長さ・太さ等の規格確認は安全な施術に必要である。

答え・4肢解説

正答：ウ．包装の装飾色は安全性・無菌性の確認項目ではない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「包装に破損や開封痕がないか。」を評価するための説明であり、今回の「包装の印刷色が施術室の内装と調和しているか。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「使用期限など製品表示に問題がないか。」を評価するための説明であり、今回の「包装の印刷色が施術室の内装と調和しているか。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「包装の印刷色が施術室の内装と調和しているか。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「製品の規格が予定する施術に適しているか。」を評価するための説明であり、今回の「包装の印刷色が施術室の内装と調和しているか。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：包装の装飾色は安全性・無菌性の確認項目ではない。包装の装飾色は安全性・無菌性の確認項目ではない。

Q012

3-1 鍼具 > 鍼の構造 | 難易度：応用

鍼の構造の論点「太さと長さの選択」について、「目的、刺鍼部位、患者の状態などを考慮して長さ・太さを選ぶ。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．太さが安全性を一律に高めるわけではなく、刺激量や組織への影響も変わる。
- イ．必要以上に長い鍼を選ぶ合理性はなく、部位に応じた長さが必要である。
- ウ．患者や部位による個別性を無視した規格選択は適切でない。
- エ．鍼の長さ・太さは、刺鍼部位の解剖、目的、刺激量、患者の体格・感受性などを踏まえて選択する。

答え・4肢解説

正答：エ．鍼の長さ・太さは、刺鍼部位の解剖、目的、刺激量、患者の体格・感受性などを踏まえて選択する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「太い鍼ほど常に安全なので全例で最太径を選ぶ。」を評価するための説明であり、今回の「目的、刺鍼部位、患者の状態などを考慮して長さ・太さを選ぶ。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「長い鍼ほど浅刺にも必ず適する。」を評価するための説明であり、今回の「目的、刺鍼部位、患者の状態などを考慮して長さ・太さを選ぶ。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者差を考慮せず、すべて同一規格に統一する。」を評価するための説明であり、今回の「目的、刺鍼部位、患者の状態などを考慮して長さ・太さを選ぶ。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「目的、刺鍼部位、患者の状態などを考慮して長さ・太さを選ぶ。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：鍼の長さ・太さは、刺鍼部位の解剖、目的、刺激量、患者の体格・感受性などを踏まえて選択する。鍼の長さ・太さは、刺鍼部位の解剖、目的、刺激量、患者の体格・感受性などを踏まえて選択する。

Q013

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：基礎

材質の論点「ステンレス鍼」について、「ステンレス鋼」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．現在の単回使用毫鍼では、強度・耐食性などからステンレス鋼が広く用いられる。
- イ．木材は刺入用毫鍼の鍼体材料には用いない。
- ウ．陶磁器は細い刺入針の材料として適さない。
- エ．天然ゴムは毫鍼の鍼体材料ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．現在の単回使用毫鍼では、強度・耐食性などからステンレス鋼が広く用いられる。

ア：正しい。この説明が「ステンレス鋼」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「木材」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陶磁器」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「天然ゴム」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼」を支持する根拠にはならない。

総合解説：現在の単回使用毫鍼では、強度・耐食性などからステンレス鋼が広く用いられる。現在の単回使用毫鍼では、強度・耐食性などからステンレス鋼が広く用いられる。

Q014

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：基礎

材質の論点「耐食性」について、「比較的耐食性に優れ、実用的な強度をもつ。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．ステンレス鋼は水分で直ちに崩壊する材料ではない。
- イ．ステンレス鋼は比較的耐食性・強度に優れ、毫鍼材料として広く用いられる。
- ウ．金属であり電気伝導性をもつ。
- エ．常温で容易に溶融する材料ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．ステンレス鋼は比較的耐食性・強度に優れ、毫鍼材料として広く用いられる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「水分に触れると直ちに崩壊する。」を評価するための説明であり、今回の「比較的耐食性に優れ、実用的な強度をもつ。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「比較的耐食性に優れ、実用的な強度をもつ。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「電気を全く通さない絶縁体である。」を評価するための説明であり、今回の「比較的耐食性に優れ、実用的な強度をもつ。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「常温で容易に溶融する。」を評価するための説明であり、今回の「比較的耐食性に優れ、実用的な強度をもつ。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：ステンレス鋼は比較的耐食性・強度に優れ、毫鍼材料として広く用いられる。ステンレス鋼は比較的耐食性・強度に優れ、毫鍼材料として広く用いられる。

Q015

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：基礎

材質の論点「銀鍼の性質」について、「ステンレス鋼に比べ軟らかく、変形しやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．銀はステンレス鋼より一般に軟らかく、変形しやすい。
- イ．銀は金属であり電気伝導性が高い。
- ウ．銀は比較的軟らかく、ステンレス鋼より曲がりやすい特性がある。
- エ．銀は硫化などにより変色することがある。

答え・4肢解説

正答：ウ．銀は比較的軟らかく、ステンレス鋼より曲がりやすい特性がある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「ステンレス鋼より常に硬く折れにくい。」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼に比べ軟らかく、変形しやすい。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「非金属なので電気を通さない。」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼に比べ軟らかく、変形しやすい。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「ステンレス鋼に比べ軟らかく、変形しやすい。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腐食や変色を全く生じない。」を評価するための説明であり、今回の「ステンレス鋼に比べ軟らかく、変形しやすい。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：銀は比較的軟らかく、ステンレス鋼より曲がりやすい特性がある。銀は比較的軟らかく、ステンレス鋼より曲がりやすい特性がある。

Q016

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：標準

材質の論点「金鍼の性質」について、「比較的軟らかく、材料として高価である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．金は一般にステンレス鋼より高価である。
- イ．金は良好な電気伝導性をもつ金属である。
- ウ．金は展延性のある金属であり、触れるだけで粉末化する性質ではない。
- エ．金は比較的軟らかく、貴金属であるため材料価格も高い。

答え・4肢解説

正答：エ．金は比較的軟らかく、貴金属であるため材料価格も高い。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「ステンレス鋼より著しく安価である。」を評価するための説明であり、今回の「比較的軟らかく、材料として高価である。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「金属ではないため通電できない。」を評価するための説明であり、今回の「比較的軟らかく、材料として高価である。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「非常に脆く、触れるだけで粉末になる。」を評価するための説明であり、今回の「比較的軟らかく、材料として高価である。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「比較的軟らかく、材料として高価である。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：金は比較的軟らかく、貴金属であるため材料価格も高い。金は比較的軟らかく、貴金属であるため材料価格も高い。

Q017

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：標準

材質の論点「導電性」について、「電気伝導性」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼通電では金属鍼を電極として電流を流すため、電気伝導性が関係する。
- イ．透明性は鍼通電の成立条件ではない。
- ウ．鍼体が水に溶けることは望ましい性質ではない。
- エ．鍼通電に必要なのは主に導電性であり、強磁性ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．鍼通電では金属鍼を電極として電流を流すため、電気伝導性が関係する。

ア：正しい。この説明が「電気伝導性」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「完全な透明性」を評価するための説明であり、今回の「電気伝導性」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「水への可溶性」を評価するための説明であり、今回の「電気伝導性」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「強い磁石性だけ」を評価するための説明であり、今回の「電気伝導性」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼通電では金属鍼を電極として電流を流すため、電気伝導性が関係する。鍼通電では金属鍼を電極として電流を流すため、電気伝導性が関係する。

Q018

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：標準

材質の論点「弾性と変形」について、「強度や弾性」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．色彩は鍼体の機械的安全性を直接決めない。
- イ．鍼体の強度・弾性は曲がり、変形、折損などの機械的安全性に関係する。
- ウ．包装も重要だが、鍼材料そのものの機械的性質ではない。
- エ．製品名の文字数は材料特性と無関係である。

答え・4肢解説

正答：イ．鍼体の強度・弾性は曲がり、変形、折損などの機械的安全性に関係する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「色彩の鮮やかさ」を評価するための説明であり、今回の「強度や弾性」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「強度や弾性」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「包装紙の厚さだけ」を評価するための説明であり、今回の「強度や弾性」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「製品名の文字数」を評価するための説明であり、今回の「強度や弾性」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼体の強度・弾性は曲がり、変形、折損などの機械的安全性に関係する。鍼体の強度・弾性は曲がり、変形、折損などの機械的安全性に関係する。

Q019

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：標準

材質の論点「腐食リスク」について、「使用せず廃棄し、正常な鍼を用いる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．消毒で金属腐食そのものが修復されるわけではない。
- イ．異常のある器具を患者に使用すべきではない。
- ウ．表面異常や腐食が疑われる鍼は安全性が担保できないため使用しない。
- エ．曲げ加工はさらに破損リスクを高める。

答え・4肢解説

正答：ウ．表面異常や腐食が疑われる鍼は安全性が担保できないため使用しない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「アルコールで拭けば必ず再使用できる。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず廃棄し、正常な鍼を用いる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「腐食部を患者の皮膚内に入れない程度なら使用する。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず廃棄し、正常な鍼を用いる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「使用せず廃棄し、正常な鍼を用いる。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「強く曲げて腐食部を隠して使用する。」を評価するための説明であり、今回の「使用せず廃棄し、正常な鍼を用いる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：表面異常や腐食が疑われる鍼は安全性が担保できないため使用しない。表面異常や腐食が疑われる鍼は安全性が担保できないため使用しない。

Q020

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：標準

材質の論点「表面処理」について、「刺入時の摩擦を低減し、操作性を高める。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼体を水溶性にすることが目的ではない。
- イ．表面処理が使用後の自動滅菌を行うわけではない。
- ウ．表面処理で金属鍼が非金属になるわけではない。
- エ．製品によっては潤滑性を高める表面処理が行われ、刺入抵抗の低減などを目的とする。

答え・4肢解説

正答：エ．製品によっては潤滑性を高める表面処理が行われ、刺入抵抗の低減などを目的とする。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼体を水に溶けやすくする。」を評価するための説明であり、今回の「刺入時の摩擦を低減し、操作性を高める。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「使用後に自動的に滅菌する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入時の摩擦を低減し、操作性を高める。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を非金属へ変化させる。」を評価するための説明であり、今回の「刺入時の摩擦を低減し、操作性を高める。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「刺入時の摩擦を低減し、操作性を高める。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：製品によっては潤滑性を高める表面処理が行われ、刺入抵抗の低減などを目的とする。製品によっては潤滑性を高める表面処理が行われ、刺入抵抗の低減などを目的とする。

Q021

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：応用

材質の論点「材質選択」について、「強度、耐食性、操作性など複数の特性を考慮する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼材料の評価では、強度・弾性・耐食性・操作性など複数の特性を総合して考える。
- イ．価格だけでは安全性や操作性を評価できない。
- ウ．金属種によって硬さ、弾性、耐食性などが異なる。
- エ．柔らかさだけで安全性は決まらず、変形しやすさ等も考慮する。

答え・4肢解説

正答：ア．鍼材料の評価では、強度・弾性・耐食性・操作性など複数の特性を総合して考える。

ア：正しい。この説明が「強度、耐食性、操作性など複数の特性を考慮する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「価格だけで決め、機械的性質は考慮しない。」を評価するための説明であり、今回の「強度、耐食性、操作性など複数の特性を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「金属なら材質差はないとみなす。」を評価するための説明であり、今回の「強度、耐食性、操作性など複数の特性を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「柔らかいほど必ず安全と判断する。」を評価するための説明であり、今回の「強度、耐食性、操作性など複数の特性を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼材料の評価では、強度・弾性・耐食性・操作性など複数の特性を総合して考える。鍼材料の評価では、強度・弾性・耐食性・操作性など複数の特性を総合して考える。

Q022

3-1 鍼具 > 材質 | 難易度：応用

材質の論点「材質比較」について、「硬さや弾性などの機械的性質が材質ごとに異なるため。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．金属ごとに機械的性質は異なる。
- イ．材質による硬さ・弾性・展延性などの違いが、しなりや操作感に影響する。
- ウ．印刷表示が鍼体の機械的操作感を決めるわけではない。
- エ．材質は鍼体の強度や弾性に直接関係する。

答え・4肢解説

正答：イ．材質による硬さ・弾性・展延性などの違いが、しなりや操作感に影響する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「すべての金属は機械的性質が完全に同じだから。」を評価するための説明であり、今回の「硬さや弾性などの機械的性質が材質ごとに異なるため。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「硬さや弾性などの機械的性質が材質ごとに異なるため。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄の文字印刷だけが操作感を決めるから。」を評価するための説明であり、今回の「硬さや弾性などの機械的性質が材質ごとに異なるため。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「材質は鍼の変形や弾性に一切関係しないから。」を評価するための説明であり、今回の「硬さや弾性などの機械的性質が材質ごとに異なるため。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：材質による硬さ・弾性・展延性などの違いが、しなりや操作感に影響する。材質による硬さ・弾性・展延性などの違いが、しなりや操作感に影響する。

Q023

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：基礎

消毒の論点「滅菌の定義」について、「対象物に存在する微生物を、芽胞を含めて生残しない状態にすること。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．それは滅菌の定義として不十分である。
- イ．洗浄は汚れを除去する工程で、滅菌とは異なる。
- ウ．滅菌は芽胞を含むすべての生存可能な微生物を除去・死滅させることを意味する。
- エ．乾燥だけで滅菌にはならない。

答え・4肢解説

正答：ウ．滅菌は芽胞を含むすべての生存可能な微生物を除去・死滅させることを意味する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「病原微生物の数を少し減らすことだけ。」を評価するための説明であり、今回の「対象物に存在する微生物を、芽胞を含めて生残しない状態にすること。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「目に見える汚れを水で除くだけ。」を評価するための説明であり、今回の「対象物に存在する微生物を、芽胞を含めて生残しない状態にすること。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「対象物に存在する微生物を、芽胞を含めて生残しない状態にすること。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚表面を乾燥させることだけ。」を評価するための説明であり、今回の「対象物に存在する微生物を、芽胞を含めて生残しない状態にすること。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：滅菌は芽胞を含むすべての生存可能な微生物を除去・死滅させることを意味する。滅菌は芽胞を含むすべての生存可能な微生物を除去・死滅させることを意味する。

Q024

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：基礎

消毒の論点「単回使用鍼」について、「1人の患者への1回の使用後に廃棄する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．単回使用鍼を再処理して別患者に使用しない。
- イ．外観だけでは無菌性や安全性を保証できない。
- ウ．患者間の共用は感染対策上不適切である。
- エ．単回使用製品は再使用せず、使用後は適切に廃棄する。

答え・4肢解説

正答：エ．単回使用製品は再使用せず、使用後は適切に廃棄する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「消毒液に浸せば別の患者に再使用できる。」を評価するための説明であり、今回の「1人の患者への1回の使用後に廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖がきれいなら何度でも再使用できる。」を評価するための説明であり、今回の「1人の患者への1回の使用後に廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「同じ施術室なら患者間で共用してよい。」を評価するための説明であり、今回の「1人の患者への1回の使用後に廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「1人の患者への1回の使用後に廃棄する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：単回使用製品は再使用せず、使用後は適切に廃棄する。単回使用製品は再使用せず、使用後は適切に廃棄する。

Q025

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：標準

消毒の論点「鍼体接触回避」について、「刺入される鍼体への不要な手指接触を避ける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．刺入部となる鍼体の汚染を避けることは感染防止上重要である。
- イ．手指接触は鍼体を汚染する可能性がある。
- ウ．床に落ちた鍼は清潔性が失われたと考え使用しない。
- エ．単回使用鍼は患者間で共用しない。

答え・4肢解説

正答：ア．刺入部となる鍼体の汚染を避けることは感染防止上重要である。

ア：正しい。この説明が「刺入される鍼体への不要な手指接触を避ける。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼体を素手で何度もつまんで確認する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入される鍼体への不要な手指接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「一度床に落とした鍼を拭いて使用する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入される鍼体への不要な手指接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「包装内の鍼を複数患者で分けて使用する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入される鍼体への不要な手指接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：刺入部となる鍼体の汚染を避けることは感染防止上重要である。刺入部となる鍼体の汚染を避けることは感染防止上重要である。

Q026

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：標準

消毒の論点「手指衛生」について、「適切な手指衛生を行ったうえで清潔操作に移る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．手袋は手指衛生の代替ではない。
- イ．鍼灸施術でも手指衛生は基本的な感染防止策であり、必要なタイミングで実施する。
- ウ．目視できない微生物汚染もあるため適切な手指衛生が必要である。
- エ．患者間など必要なタイミングで手指衛生を行う。

答え・4肢解説

正答：イ．鍼灸施術でも手指衛生は基本的な感染防止策であり、必要なタイミングで実施する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手袋を着ければ手指衛生は常に不要である。」を評価するための説明であり、今回の「適切な手指衛生を行ったうえで清潔操作に移る。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「適切な手指衛生を行ったうえで清潔操作に移る。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「目に見える汚れがなければ手指衛生は一切不要である。」を評価するための説明であり、今回の「適切な手指衛生を行ったうえで清潔操作に移る。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者ごとの手指衛生は避け、1日1回だけ行う。」を評価するための説明であり、今回の「適切な手指衛生を行ったうえで清潔操作に移る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼灸施術でも手指衛生は基本的な感染防止策であり、必要なタイミングで実施する。鍼灸施術でも手指衛生は基本的な感染防止策であり、必要なタイミングで実施する。

Q027

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：標準

消毒の論点「皮膚消毒」について、「使用する消毒薬の用法に従い、適切に処置してから刺鍼する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．消毒後の不潔な接触は再汚染につながる。

イ．消毒薬は製品ごとに適正濃度・用法があり、濃ければよいわけではない。

ウ．皮膚消毒は製剤の適正な用法・濃度・接触条件に従い、処置後の再汚染を避ける。

エ．床に落ちた鍼は清潔性を失っているため使用しない。

答え・4肢解説

正答：ウ．皮膚消毒は製剤の適正な用法・濃度・接触条件に従い、処置後の再汚染を避ける。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「消毒後に不潔な指で何度も刺鍼点を触れる。」を評価するための説明であり、今回の「使用する消毒薬の用法に従い、適切に処置してから刺鍼する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「消毒薬は濃いほど必ず安全なので原液を自由に使う。」を評価するための説明であり、今回の「使用する消毒薬の用法に従い、適切に処置してから刺鍼する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「使用する消毒薬の用法に従い、適切に処置してから刺鍼する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚消毒後は汚染の有無に関係なく床に置いた鍼を用いる。」を評価するための説明であり、今回の「使用する消毒薬の用法に従い、適切に処置してから刺鍼する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：皮膚消毒は製剤の適正な用法・濃度・接触条件に従い、処置後の再汚染を避ける。
皮膚消毒は製剤の適正な用法・濃度・接触条件に従い、処置後の再汚染を避ける。

Q028

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：標準

消毒の論点「鋭利物廃棄」について、「穿刺に耐える専用の鋭利物容器へ速やかに廃棄する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．一般ゴミ袋では穿刺事故の危険がある。

イ．机上放置と素手回収は針刺し事故の危険を高める。

ウ．手で折る操作自体が針刺し・飛散の危険を高める。

エ．使用済み鍼は針刺し事故を防ぐため、耐穿刺性のある適切な鋭利物容器に廃棄する。

答え・4肢解説

正答：エ．使用済み鍼は針刺し事故を防ぐため、耐穿刺性のある適切な鋭利物容器に廃棄する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「一般ゴミ袋の底へ直接入れる。」を評価するための説明であり、今回の「穿刺に耐える専用の鋭利物容器へ速やかに廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「机上にまとめ、診療終了後に素手で集める。」を評価するための説明であり、今回の「穿刺に耐える専用の鋭利物容器へ速やかに廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼体を手で折ってから紙袋へ入れる。」を評価するための説明であり、今回の「穿刺に耐える専用の鋭利物容器へ速やかに廃棄する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「穿刺に耐える専用の鋭利物容器へ速やかに廃棄する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：使用済み鍼は針刺し事故を防ぐため、耐穿刺性のある適切な鋭利物容器に廃棄する。
使用済み鍼は針刺し事故を防ぐため、耐穿刺性のある適切な鋭利物容器に廃棄する。

Q029

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：応用

消毒の論点「包装破損」について、「無菌性を保証できないため使用しない。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．包装破損時は滅菌状態の維持を保証できないため、新しい正常な製品へ交換する。
- イ．局所的な消毒で製品全体の無菌性は保証できない。
- ウ．破損後にテープで塞いでも無菌性は回復しない。
- エ．無菌性は外観だけでは判断できない。

答え・4肢解説

正答：ア．包装破損時は滅菌状態の維持を保証できないため、新しい正常な製品へ交換する。

ア：正しい。この説明が「無菌性を保証できないため使用しない。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼尖だけ消毒して使用する。」を評価するための説明であり、今回の「無菌性を保証できないため使用しない。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「包装の穴をテープで塞いで使用する。」を評価するための説明であり、今回の「無菌性を保証できないため使用しない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「見た目がきれいならそのまま使用する。」を評価するための説明であり、今回の「無菌性を保証できないため使用しない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：包装破損時は滅菌状態の維持を保証できないため、新しい正常な製品へ交換する。
包装破損時は滅菌状態の維持を保証できないため、新しい正常な製品へ交換する。

Q030

3-1 鍼具 > 消毒 | 難易度：応用

消毒の論点「標準予防策」について、「標準予防策に基づき、血液曝露を想定した防護と手指衛生を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．申告の有無だけで感染リスクを判断しない。
- イ．感染症の既知・未知にかかわらず、血液・体液は感染性を有する可能性があるものとして扱う。
- ウ．微量な血液でも感染対策の対象となる。
- エ．使用済み鋭利物の放置は針刺し事故の原因となる。

答え・4肢解説

正答：イ．感染症の既知・未知にかかわらず、血液・体液は感染性を有する可能性があるものとして扱う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者に感染症の申告がなければ対策は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「標準予防策に基づき、血液曝露を想定した防護と手指衛生を行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「標準予防策に基づき、血液曝露を想定した防護と手指衛生を行う。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血液は目に見えなければ感染源にならない。」を評価するための説明であり、今回の「標準予防策に基づき、血液曝露を想定した防護と手指衛生を行う。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「同じ患者なら使用済み鍼を机上に放置してよい。」を評価するための説明であり、今回の「標準予防策に基づき、血液曝露を想定した防護と手指衛生を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：感染症の既知・未知にかかわらず、血液・体液は感染性を有する可能性があるものとして扱う。感染症の既知・未知にかかわらず、血液・体液は感染性を有する可能性があるものとして扱う。

Q031

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：基礎

刺入法の論点「前揉捏」について、「前揉捏」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．後揉捏は抜鍼後に行う操作である。
- イ．抜鍼は鍼を体外へ抜去する操作である。
- ウ．前揉捏は刺鍼前に施術部周囲へ行う基本操作である。
- エ．灸頭鍼は刺入鍼の鍼柄部に艾を付けて燃焼させる特殊鍼法である。

答え・4肢解説

正答：ウ．前揉捏は刺鍼前に施術部周囲へ行う基本操作である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「後揉捏」を評価するための説明であり、今回の「前揉捏」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼」を評価するための説明であり、今回の「前揉捏」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「前揉捏」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「灸頭鍼」を評価するための説明であり、今回の「前揉捏」を支持する根拠にはならない。

総合解説：前揉捏は刺鍼前に施術部周囲へ行う基本操作である。前揉捏は刺鍼前に施術部周囲へ行う基本操作である。

Q032

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：基礎

刺入法の論点「押手」について、「刺鍼部を固定し、鍼管や周囲組織を安定させる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．廃棄は押手の本来の役割ではない。
- イ．艾炷の成形は灸法に関する操作である。
- ウ．押手は脈拍測定のための手ではない。
- エ．押手は刺鍼部を固定し、鍼管や組織を安定させて切皮・刺入を補助する。

答え・4肢解説

正答：エ．押手は刺鍼部を固定し、鍼管や組織を安定させて切皮・刺入を補助する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を廃棄容器へ運ぶことだけ。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼部を固定し、鍼管や周囲組織を安定させる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「艾炷を成形すること。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼部を固定し、鍼管や周囲組織を安定させる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脈拍だけを測定すること。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼部を固定し、鍼管や周囲組織を安定させる。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「刺鍼部を固定し、鍼管や周囲組織を安定させる。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：押手は刺鍼部を固定し、鍼管や組織を安定させて切皮・刺入を補助する。押手は刺鍼部を固定し、鍼管や組織を安定させて切皮・刺入を補助する。

Q033

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：基礎

刺入法の論点「切皮」について、「鍼尖を皮膚に通過させる最初の操作である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．切皮は鍼尖を皮膚に通過させ、鍼体を刺入可能な状態にする初期操作である。
- イ．完全に抜去する操作は抜鍼である。
- ウ．抜鍼後などの揉捏とは異なる。
- エ．艾の燃焼は灸法である。

答え・4肢解説

正答：ア．切皮は鍼尖を皮膚に通過させ、鍼体を刺入可能な状態にする初期操作である。

ア：正しい。この説明が「鍼尖を皮膚に通過させる最初の操作である。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を完全に抜去する操作である。」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖を皮膚に通過させる最初の操作である。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「刺鍼後に皮膚を揉む操作である。」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖を皮膚に通過させる最初の操作である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「艾を皮膚上で燃焼させる操作である。」を評価するための説明であり、今回の「鍼尖を皮膚に通過させる最初の操作である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：切皮は鍼尖を皮膚に通過させ、鍼体を刺入可能な状態にする初期操作である。切皮は鍼尖を皮膚に通過させ、鍼体を刺入可能な状態にする初期操作である。

Q034

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：基礎

刺入法の論点「旋撚刺法」について、「旋撚刺法」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．送り込み刺法は鍼を送り込むように進める方法である。
- イ．旋撚刺法は鍼柄を左右に旋回させながら刺入する方法である。
- ウ．圧鍼刺法は圧を加えながら刺入する方法である。
- エ．知熱灸は無痕灸の一種で刺入法ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．旋撚刺法は鍼柄を左右に旋回させながら刺入する方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「送り込み刺法」を評価するための説明であり、今回の「旋撚刺法」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「旋撚刺法」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「圧鍼刺法」を評価するための説明であり、今回の「旋撚刺法」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「知熱灸」を評価するための説明であり、今回の「旋撚刺法」を支持する根拠にはならない。

総合解説：旋撚刺法は鍼柄を左右に旋回させながら刺入する方法である。旋撚刺法は鍼柄を左右に旋回させながら刺入する方法である。

Q035

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：基礎

刺入法の論点「送り込み刺法」について、「送り込み刺法」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．旋撚刺法は回転を加えながら刺入する。
- イ．刺絡療法は微量の出血を伴う特殊鍼法である。
- ウ．送り込み刺法は鍼体を順次送り込むようにして目的深度へ進める方法である。
- エ．透熱灸は有痕灸の一種である。

答え・4肢解説

正答：ウ．送り込み刺法は鍼体を順次送り込むようにして目的深度へ進める方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「旋撚刺法」を評価するための説明であり、今回の「送り込み刺法」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「刺絡療法」を評価するための説明であり、今回の「送り込み刺法」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「送り込み刺法」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「透熱灸」を評価するための説明であり、今回の「送り込み刺法」を支持する根拠にはならない。

総合解説：送り込み刺法は鍼体を順次送り込むようにして目的深度へ進める方法である。送り込み刺法は鍼体を順次送り込むようにして目的深度へ進める方法である。

Q036

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「圧鍼刺法」について、「鍼に持続的な圧を加えながら刺入する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鍼柄上で艾を燃焼させるのは灸頭鍼である。
- イ．圧鍼刺法は刺入法であり、擦過だけではない。
- ウ．出血を目的とする方法ではない。
- エ．圧鍼刺法は鍼に軸方向の圧力を加えながら刺入する方法である。

答え・4肢解説

正答：エ．圧鍼刺法は鍼に軸方向の圧力を加えながら刺入する方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄に艾を付けて燃焼させる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼に持続的な圧を加えながら刺入する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚表面を擦過するだけで刺入しない。」を評価するための説明であり、今回の「鍼に持続的な圧を加えながら刺入する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼後に必ず出血させる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼に持続的な圧を加えながら刺入する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「鍼に持続的な圧を加えながら刺入する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：圧鍼刺法は鍼に軸方向の圧力を加えながら刺入する方法である。圧鍼刺法は鍼に軸方向の圧力を加えながら刺入する方法である。

Q037

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「解剖学的深度」について、「体表から胸膜・肺までの解剖学的関係を考慮する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．胸郭部では肺・胸膜など深部構造との位置関係を踏まえ、方向・深度を慎重に決める。
- イ．体格や部位には個人差があり、身長だけで安全深度は決まらない。
- ウ．鍼が長いことは安全域拡大を意味しない。
- エ．刺鍼方向は部位の解剖学的条件に応じて選ぶ必要がある。

答え・4肢解説

正答：ア．胸郭部では肺・胸膜など深部構造との位置関係を踏まえ、方向・深度を慎重に決める。

ア：正しい。この説明が「体表から胸膜・肺までの解剖学的関係を考慮する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の身長だけで一律の深度を決める。」を評価するための説明であり、今回の「体表から胸膜・肺までの解剖学的関係を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「長い鍼なら安全域も必ず広がると考える。」を評価するための説明であり、今回の「体表から胸膜・肺までの解剖学的関係を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「刺鍼方向は解剖学に関係なく常に垂直とする。」を評価するための説明であり、今回の「体表から胸膜・肺までの解剖学的関係を考慮する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：胸郭部では肺・胸膜など深部構造との位置関係を踏まえ、方向・深度を慎重に決める。胸郭部では肺・胸膜など深部構造との位置関係を踏まえ、方向・深度を慎重に決める。

Q038

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「異常抵抗」について、「無理に進めず、刺入方向・深度や患者の状態を再評価する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．強行刺入は組織損傷や鍼の変形を招く。
- イ．異常な抵抗や鋭い痛みは組織への不適切な接触などを示す可能性があり、操作を中断して再評価する。
- ウ．患者の訴えを無視して刺入を継続すべきではない。
- エ．強制的な操作は安全性を低下させる。

答え・4肢解説

正答：イ．異常な抵抗や鋭い痛みは組織への不適切な接触などを示す可能性があり、操作を中断して再評価する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「抵抗を超えるまで強く押し込む。」を評価するための説明であり、今回の「無理に進めず、刺入方向・深度や患者の状態を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「無理に進めず、刺入方向・深度や患者の状態を再評価する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「痛みを無視して予定深度まで刺入する。」を評価するための説明であり、今回の「無理に進めず、刺入方向・深度や患者の状態を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄を叩いて強制的に進める。」を評価するための説明であり、今回の「無理に進めず、刺入方向・深度や患者の状態を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：異常な抵抗や鋭い痛みは組織への不適切な接触などを示す可能性があり、操作を中断して再評価する。異常な抵抗や鋭い痛みは組織への不適切な接触などを示す可能性があり、操作を中断して再評価する。

Q039

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「抜鍼」について、「鍼の状態と患者反応を確認しながら無理なく抜去する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．無理な抜去は疼痛や組織損傷を招く可能性がある。
- イ．抜鍼後は出血や皮膚状態を確認する。
- ウ．抜鍼は抵抗や患者の反応を確認し、安全に抜去した後、出血等も確認する。
- エ．単回使用鍼は再使用しない。

答え・4肢解説

正答：ウ．抜鍼は抵抗や患者の反応を確認し、安全に抜去した後、出血等も確認する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「抵抗があっても急激に強く引き抜く。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の状態と患者反応を確認しながら無理なく抜去する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼後の出血確認は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の状態と患者反応を確認しながら無理なく抜去する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「鍼の状態と患者反応を確認しながら無理なく抜去する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼した鍼を他患者へ再使用する。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の状態と患者反応を確認しながら無理なく抜去する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：抜鍼は抵抗や患者の反応を確認し、安全に抜去した後、出血等も確認する。抜鍼は抵抗や患者の反応を確認し、安全に抜去した後、出血等も確認する。

Q040

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「後揉捏」について、「抜鍼後」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．切皮前に行う揉捏は前揉捏である。
- イ．包装開封前の操作ではない。
- ウ．艾の製造工程とは無関係である。
- エ．後揉捏は抜鍼後に刺鍼部周囲へ行う基本操作である。

答え・4肢解説

正答：エ．後揉捏は抜鍼後に刺鍼部周囲へ行う基本操作である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「切皮直前だけ」を評価するための説明であり、今回の「抜鍼後」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼の個包装を開ける前だけ」を評価するための説明であり、今回の「抜鍼後」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「艾を精製する工程中」を評価するための説明であり、今回の「抜鍼後」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「抜鍼後」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：後揉捏は抜鍼後に刺鍼部周囲へ行う基本操作である。後揉捏は抜鍼後に刺鍼部周囲へ行う基本操作である。

Q041

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「斜刺・横刺の考え方」について、「部位の解剖と目的に応じ、直刺・斜刺・横刺などを選択する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．刺鍼方向は解剖学的安全性、対象組織、目的に応じて調整する。
- イ．全身一律の刺鍼方向は解剖学的差異を無視している。
- ウ．骨や周辺組織を考慮し、無理な深刺を避ける。
- エ．深部臓器の位置は安全な方向・深度設定に重要である。

答え・4肢解説

正答：ア．刺鍼方向は解剖学的安全性、対象組織、目的に応じて調整する。

ア：正しい。この説明が「部位の解剖と目的に応じ、直刺・斜刺・横刺などを選択する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「全身すべて直刺に統一する。」を評価するための説明であり、今回の「部位の解剖と目的に応じ、直刺・斜刺・横刺などを選択する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「骨の直上では必ず深く垂直に刺入する。」を評価するための説明であり、今回の「部位の解剖と目的に応じ、直刺・斜刺・横刺などを選択する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「臓器の位置を考慮する必要はない。」を評価するための説明であり、今回の「部位の解剖と目的に応じ、直刺・斜刺・横刺などを選択する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：刺鍼方向は解剖学的安全性、対象組織、目的に応じて調整する。刺鍼方向は解剖学的安全性、対象組織、目的に応じて調整する。

Q042

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：標準

刺入法の論点「刺入深度と刺激量」について、「刺入深度、手技、刺激時間、患者の感受性など。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．包装色は生体への刺激量を決めない。
- イ．鍼刺激量は刺入深度・手技・時間・部位・患者の感受性など複数要因で決まる。
- ウ．利き手だけで刺激量は決まらない。
- エ．壁紙は鍼刺激量の主要決定因子ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．鍼刺激量は刺入深度・手技・時間・部位・患者の感受性など複数要因で決まる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼の包装色だけ。」を評価するための説明であり、今回の「刺入深度、手技、刺激時間、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「刺入深度、手技、刺激時間、患者の感受性など。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「施術者の利き手だけ。」を評価するための説明であり、今回の「刺入深度、手技、刺激時間、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「治療室の壁紙だけ。」を評価するための説明であり、今回の「刺入深度、手技、刺激時間、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼刺激量は刺入深度・手技・時間・部位・患者の感受性など複数要因で決まる。鍼刺激量は刺入深度・手技・時間・部位・患者の感受性など複数要因で決まる。

Q043

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：応用

刺入法の論点「気胸予防」について、「体格と局所解剖を確認し、必要以上の深刺を避ける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．やせ型では皮膚から胸膜までの距離が短い場合があり、一律の深刺は危険である。
- イ．鍼長と刺入深度を混同してはならず、全長刺入は危険を高める。
- ウ．胸郭部では患者の体格・部位の解剖を踏まえ、肺への到達を避ける方向・深度を選ぶ。
- エ．胸痛や呼吸器症状は有害事象を疑い施術を中止して評価する必要がある。

答え・4肢解説

正答：ウ．胸郭部では患者の体格・部位の解剖を踏まえ、肺への到達を避ける方向・深度を選ぶ。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「体格に関係なく最大深度まで刺入する。」を評価するための説明であり、今回の「体格と局所解剖を確認し、必要以上の深刺を避ける。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「胸郭部では必ず長鍼を全長刺入する。」を評価するための説明であり、今回の「体格と局所解剖を確認し、必要以上の深刺を避ける。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「体格と局所解剖を確認し、必要以上の深刺を避ける。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「咳や胸痛が生じても施術を継続する。」を評価するための説明であり、今回の「体格と局所解剖を確認し、必要以上の深刺を避ける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：胸郭部では患者の体格・部位の解剖を踏まえ、肺への到達を避ける方向・深度を選ぶ。胸郭部では患者の体格・部位の解剖を踏まえ、肺への到達を避ける方向・深度を選ぶ。

Q044

3-2 刺鍼 > 刺入法 | 難易度：応用

刺入法の論点「神経刺激時対応」について、「直ちに強い操作をやめ、鍼の位置や症状を確認して必要に応じ抜鍼する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．強い神経症状を治療効果の指標として強行すべきではない。
- イ．症状を無視した反復刺激は神経損傷リスクを高める。
- ウ．患者の異常反応がある場合は時間より安全確認を優先する。
- エ．強い電撃様痛は神経への直接刺激などを示す可能性があり、安全を優先して操作を中止・再評価する。

答え・4肢解説

正答：エ．強い電撃様痛は神経への直接刺激などを示す可能性があり、安全を優先して操作を中止・再評価する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「放散痛が強いほど効果的としてさらに深刺する。」を評価するための説明であり、今回の「直ちに強い操作をやめ、鍼の位置や症状を確認して必要に応じ抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「患者に知らせず同じ方向へ強く雀啄する。」を評価するための説明であり、今回の「直ちに強い操作をやめ、鍼の位置や症状を確認して必要に応じ抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「痛みがあっても予定時間まで操作を続ける。」を評価するための説明であり、今回の「直ちに強い操作をやめ、鍼の位置や症状を確認して必要に応じ抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「直ちに強い操作をやめ、鍼の位置や症状を確認して必要に応じ抜鍼する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：強い電撃様痛は神経への直接刺激などを示す可能性があり、安全を優先して操作を中止・再評価する。強い電撃様痛は神経への直接刺激などを示す可能性があり、安全を優先して操作を中止・再評価する。

Q045

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：基礎

補瀉の論点「虚実と補瀉」について、「虚証には補法、実証には瀉法を用いる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．基本的には不足を補うのが補法、過剰を瀉するのが瀉法という考え方である。
- イ．虚証は不足を補う補法が基本となる。
- ウ．実証は過剰を除く瀉法が基本となる。
- エ．補瀉は虚実の病態判断と関連づけて用いられる。

答え・4肢解説

正答：ア．基本的には不足を補うのが補法、過剰を瀉するのが瀉法という考え方である。

ア：正しい。この説明が「虚証には補法、実証には瀉法を用いる。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「虚証には必ず瀉法だけを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「虚証には補法、実証には瀉法を用いる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「実証には必ず補法だけを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「虚証には補法、実証には瀉法を用いる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「虚実と補瀉には関係がない。」を評価するための説明であり、今回の「虚証には補法、実証には瀉法を用いる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：基本的には不足を補うのが補法、過剰を瀉するのが瀉法という考え方である。基本的には不足を補うのが補法、過剰を瀉するのが瀉法という考え方である。

Q046

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：基礎

補瀉の論点「補法の目的」について、「不足している機能や正気を補う方向に働きかける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．邪気を増やすことは補法の目的ではない。
- イ．補法は虚の状態に対して不足を補うことを目的とする。
- ウ．補法は強刺激と同義ではなく、患者状態に応じて操作する。
- エ．出血増加を目的とするものではない。

答え・4肢解説

正答：イ．補法は虚の状態に対して不足を補うことを目的とする。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「過剰な邪気をさらに増やす。」を評価するための説明であり、今回の「不足している機能や正気を補う方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「不足している機能や正気を補う方向に働きかける。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての患者に強刺激を加える。」を評価するための説明であり、今回の「不足している機能や正気を補う方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「出血量を増やすことを唯一の目的とする。」を評価するための説明であり、今回の「不足している機能や正気を補う方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：補法は虚の状態に対して不足を補うことを目的とする。補法は虚の状態に対して不足を補うことを目的とする。

Q047

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：基礎

補瀉の論点「瀉法の目的」について、「実している状態や邪気の過剰を除く方向に働きかける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．虚の不足をさらに消耗させることが目的ではない。
- イ．瀉法は刺鍼操作の方法・考え方であり、無治療を意味しない。
- ウ．瀉法は実証など過剰な状態を調整し、邪気を除く方向に働きかける。
- エ．温熱刺激だけに限定される概念ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．瀉法は実証など過剰な状態を調整し、邪気を除く方向に働きかける。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「不足をさらに消耗させることを目的とする。」を評価するための説明であり、今回の「実している状態や邪気の過剰を除く方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「刺鍼を一切行わないことを意味する。」を評価するための説明であり、今回の「実している状態や邪気の過剰を除く方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「実している状態や邪気の過剰を除く方向に働きかける。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず温熱刺激だけを行う。」を評価するための説明であり、今回の「実している状態や邪気の過剰を除く方向に働きかける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：瀉法は実証など過剰な状態を調整し、邪気を除く方向に働きかける。瀉法は実証など過剰な状態を調整し、邪気を除く方向に働きかける。

Q048

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：標準

補瀉の論点「迎随補瀉」について、「随」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「迎」は経脈の流注に逆らう方向を意味し、瀉法側として説明される。
- イ．切皮は鍼尖を皮膚へ通す基本操作で、迎随の区分ではない。
- ウ．抜鍼は鍼を抜去する操作である。
- エ．「随」は経脈の流れに従う方向を意味し、伝統的には補法側の操作として説明される。

答え・4肢解説

正答：エ．「随」は経脈の流れに従う方向を意味し、伝統的には補法側の操作として説明される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「迎」を評価するための説明であり、今回の「随」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「切皮」を評価するための説明であり、今回の「随」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼」を評価するための説明であり、今回の「随」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「随」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：「随」は経脈の流れに従う方向を意味し、伝統的には補法側の操作として説明される。「随」は経脈の流れに従う方向を意味し、伝統的には補法側の操作として説明される。

Q049

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：標準

補瀉の論点「開闔補瀉」について、「補法」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．開闔補瀉では、補法は抜鍼後に鍼孔を閉じるよう按压する操作として説明される。
- イ．瀉法では鍼孔を開く方向の操作として説明される。
- ウ．刺絡法は微量出血を目的とする特殊鍼法である。
- エ．灸頭鍼は鍼と艾の温熱を組み合わせる特殊鍼法である。

答え・4肢解説

正答：ア．開闔補瀉では、補法は抜鍼後に鍼孔を閉じるよう按压する操作として説明される。

ア：正しい。この説明が「補法」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「瀉法」を評価するための説明であり、今回の「補法」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「刺絡法」を評価するための説明であり、今回の「補法」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「灸頭鍼法」を評価するための説明であり、今回の「補法」を支持する根拠にはならない。

総合解説：開闔補瀉では、補法は抜鍼後に鍼孔を閉じるよう按压する操作として説明される。開闔補瀉では、補法は抜鍼後に鍼孔を閉じるよう按压する操作として説明される。

Q050

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：標準

補瀉の論点「呼吸補瀉」について、「患者の呼気時」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．吸気時刺入は瀉法側の説明に対応する。
- イ．呼吸補瀉では、補法は呼気時に刺入し、吸気時に抜鍼する方法として説明される。
- ウ．呼吸を止めることを基本とする方法ではない。
- エ．心拍停止は補瀉手技の条件ではなく緊急状態である。

答え・4肢解説

正答：イ．呼吸補瀉では、補法は呼気時に刺入し、吸気時に抜鍼する方法として説明される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者の吸気時だけ」を評価するための説明であり、今回の「患者の呼気時」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「患者の呼気時」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「呼吸停止時だけ」を評価するための説明であり、今回の「患者の呼気時」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「心拍停止時」を評価するための説明であり、今回の「患者の呼気時」を支持する根拠にはならない。

総合解説：呼吸補瀉では、補法は呼気時に刺入し、吸気時に抜鍼する方法として説明される。呼吸補瀉では、補法は呼気時に刺入し、吸気時に抜鍼する方法として説明される。

Q051

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：標準

補瀉の論点「徐疾補瀉」について、「ゆっくり刺入し、比較的速やかに抜鍼する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．速く刺入し徐々に抜く操作は瀉法側として説明される。
- イ．徐疾補瀉は刺入・抜鍼速度を用いる手技である。
- ウ．徐疾補瀉では、補法は徐々に刺入し、比較的速やかに抜鍼する方法として説明される。
- エ．出血は徐疾補瀉の必須条件ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．徐疾補瀉では、補法は徐々に刺入し、比較的速やかに抜鍼する方法として説明される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「速く刺入し、ゆっくり抜鍼する。」を評価するための説明であり、今回の「ゆっくり刺入し、比較的速やかに抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「刺入も抜鍼も行わない。」を評価するための説明であり、今回の「ゆっくり刺入し、比較的速やかに抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「ゆっくり刺入し、比較的速やかに抜鍼する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず出血させてから抜鍼する。」を評価するための説明であり、今回の「ゆっくり刺入し、比較的速やかに抜鍼する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：徐疾補瀉では、補法は徐々に刺入し、比較的速やかに抜鍼する方法として説明される。徐疾補瀉では、補法は徐々に刺入し、比較的速やかに抜鍼する方法として説明される。

Q052

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：標準

補瀉の論点「患者感受性」について、「証だけでなく、患者の体力・感受性・局所状態も考慮する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．虚証で過大刺激を加えることは適切でない。
- イ．実証でも解剖学的安全性は必須である。
- ウ．施術中の患者反応を確認しながら操作する必要がある。
- エ．補瀉は証に基づくが、安全な刺激量設定には患者の体力・感受性・部位なども考慮する。

答え・4肢解説

正答：エ．補瀉は証に基づくが、安全な刺激量設定には患者の体力・感受性・部位なども考慮する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「虚証なら刺激量が無制限に強くする。」を評価するための説明であり、今回の「証だけでなく、患者の体力・感受性・局所状態も考慮する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「実証なら解剖学的安全性を無視して深刺する。」を評価するための説明であり、今回の「証だけでなく、患者の体力・感受性・局所状態も考慮する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「補瀉では患者の反応確認は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「証だけでなく、患者の体力・感受性・局所状態も考慮する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「証だけでなく、患者の体力・感受性・局所状態も考慮する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：補瀉は証に基づくが、安全な刺激量設定には患者の体力・感受性・部位なども考慮する。補瀉は証に基づくが、安全な刺激量設定には患者の体力・感受性・部位なども考慮する。

Q053

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：応用

補瀉の論点「補法の組合せ」について、「経脈の流れに随い、抜鍼後は鍼孔を閉じる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．迎随では「随」、開闔では「閉じる」操作が補法側として説明される。
- イ．「迎」と鍼孔を開く操作は瀉法側として説明される。
- ウ．出血は補法の必須操作ではない。
- エ．補瀉は単なる刺激強度だけではなく伝統的な操作原則を含む。

答え・4肢解説

正答：ア．迎随では「随」、開闔では「閉じる」操作が補法側として説明される。

ア：正しい。この説明が「経脈の流れに随い、抜鍼後は鍼孔を閉じる。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「経脈の流れに迎い、抜鍼後は鍼孔を開く。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の流れに随い、抜鍼後は鍼孔を閉じる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず刺絡して多量に出血させる。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の流れに随い、抜鍼後は鍼孔を閉じる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「経脈方向と無関係に、強刺激だけで決める。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の流れに随い、抜鍼後は鍼孔を閉じる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：迎随では「随」、開闔では「閉じる」操作が補法側として説明される。迎随では「随」、開闔では「閉じる」操作が補法側として説明される。

Q054

3-2 刺鍼 > 補瀉 | 難易度：応用

補瀉の論点「補瀉の限界」について、「伝統的理論を踏まえつつ、解剖学的安全性と患者反応を優先する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．補瀉手技は危険部位への不適切な刺鍼を正当化しない。
- イ．伝統的補瀉法を用いる場合も、現代の安全管理・解剖学的知識・患者への説明を優先する。
- ウ．どの刺鍼法にも有害事象の可能性があるため、安全管理が必要である。
- エ．手技にかかわらず適切な説明と同意が必要である。

答え・4肢解説

正答：イ．伝統的補瀉法を用いる場合も、現代の安全管理・解剖学的知識・患者への説明を優先する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「補瀉の形式が合えば危険部位にも深刺してよい。」を評価するための説明であり、今回の「伝統的理論を踏まえつつ、解剖学的安全性と患者反応を優先する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「伝統的理論を踏まえつつ、解剖学的安全性と患者反応を優先する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「補法なら有害事象は起こらない。」を評価するための説明であり、今回の「伝統的理論を踏まえつつ、解剖学的安全性と患者反応を優先する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「瀉法なら患者への説明は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「伝統的理論を踏まえつつ、解剖学的安全性と患者反応を優先する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：伝統的補瀉法を用いる場合も、現代の安全管理・解剖学的知識・患者への説明を優先する。伝統的補瀉法を用いる場合も、現代の安全管理・解剖学的知識・患者への説明を優先する。

Q055

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：基礎

特殊鍼法の論点「小児鍼」について、「皮膚を刺入せず、接触・摩擦などの軽刺激を用いる方法がある。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．深刺を必須とする方法ではない。

イ．通電を必須としない。

ウ．小児鍼には刺入せず、接触・摩擦・圧刺激などを用いる方法がある。

エ．それは灸法の説明である。

答え・4肢解説

正答：ウ．小児鍼には刺入せず、接触・摩擦・圧刺激などを用いる方法がある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「必ず深部筋まで刺入する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を刺入せず、接触・摩擦などの軽刺激を用いる方法がある。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず低周波通電を行う。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を刺入せず、接触・摩擦などの軽刺激を用いる方法がある。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「皮膚を刺入せず、接触・摩擦などの軽刺激を用いる方法がある。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「艾炷を皮膚上で完全燃焼させる方法である。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を刺入せず、接触・摩擦などの軽刺激を用いる方法がある。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：小児鍼には刺入せず、接触・摩擦・圧刺激などを用いる方法がある。小児鍼には刺入せず、接触・摩擦・圧刺激などを用いる方法がある。

Q056

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：基礎

特殊鍼法の論点「皮内鍼」について、「短い鍼を皮内に浅く留置し、持続刺激を与える。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．胸腔内への留置は危険であり皮内鍼ではない。

イ．艾を鍼柄上で燃やすのは灸頭鍼である。

ウ．刺入しない接触刺激は小児鍼などでみられる。

エ．皮内鍼は短い専用鍼を皮内に浅く留置し、一定時間持続刺激を与える。

答え・4肢解説

正答：エ．皮内鍼は短い専用鍼を皮内に浅く留置し、一定時間持続刺激を与える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「長鍼を胸腔内へ留置する。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮内に浅く留置し、持続刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「艾を鍼柄上で燃焼させる。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮内に浅く留置し、持続刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚を刺入せず擦過だけを行う。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮内に浅く留置し、持続刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「短い鍼を皮内に浅く留置し、持続刺激を与える。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：皮内鍼は短い専用鍼を皮内に浅く留置し、一定時間持続刺激を与える。皮内鍼は短い専用鍼を皮内に浅く留置し、一定時間持続刺激を与える。

Q057

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：標準

特殊鍼法の論点「円皮鍼」について、「短い鍼を皮膚に浅く刺し、絆創膏状の基材で固定して持続刺激する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．円皮鍼は短い鍼と粘着部を一体化した器具などで、浅い刺入・留置刺激に用いる。
- イ．深部臓器へ向けて留置するものではない。
- ウ．焼灼を目的とする器具ではない。
- エ．刺絡と吸角を必須とする方法ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．円皮鍼は短い鍼と粘着部を一体化した器具などで、浅い刺入・留置刺激に用いる。

ア：正しい。この説明が「短い鍼を皮膚に浅く刺し、絆創膏状の基材で固定して持続刺激する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「長い鍼を深部臓器まで刺して固定する。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮膚に浅く刺し、絆創膏状の基材で固定して持続刺激する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を加熱して皮膚を焼灼する。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮膚に浅く刺し、絆創膏状の基材で固定して持続刺激する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず出血させて吸角を行う。」を評価するための説明であり、今回の「短い鍼を皮膚に浅く刺し、絆創膏状の基材で固定して持続刺激する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：円皮鍼は短い鍼と粘着部を一体化した器具などで、浅い刺入・留置刺激に用いる。円皮鍼は短い鍼と粘着部を一体化した器具などで、浅い刺入・留置刺激に用いる。

Q058

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：標準

特殊鍼法の論点「灸頭鍼」について、「刺入した鍼の鍼柄部に艾を取り付けて燃焼させ、温熱刺激を加える。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．灸頭鍼では鍼を刺入する。
- イ．灸頭鍼は刺入鍼の鍼柄部に艾を取り付け、鍼刺激と温熱刺激を組み合わせる。
- ウ．微量出血を目的とするのは刺絡療法である。
- エ．耳介に限定する方法ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．灸頭鍼は刺入鍼の鍼柄部に艾を取り付け、鍼刺激と温熱刺激を組み合わせる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「刺入せず鍼で皮膚を擦るだけである。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼の鍼柄部に艾を取り付けて燃焼させ、温熱刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「刺入した鍼の鍼柄部に艾を取り付けて燃焼させ、温熱刺激を加える。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「微量出血を目的として皮膚を穿刺する方法である。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼の鍼柄部に艾を取り付けて燃焼させ、温熱刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「耳介の反応点だけに限定する方法である。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼の鍼柄部に艾を取り付けて燃焼させ、温熱刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：灸頭鍼は刺入鍼の鍼柄部に艾を取り付け、鍼刺激と温熱刺激を組み合わせる。灸頭鍼は刺入鍼の鍼柄部に艾を取り付け、鍼刺激と温熱刺激を組み合わせる。

Q059

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：標準

特殊鍼法の論点「鍼通電療法」について、「刺入した鍼を電極として用い、設定した電気刺激を加える。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．艾の燃焼熱を用いるのは灸法である。
- イ．鍼通電では通常、刺入した鍼を電極とする。
- ウ．鍼通電療法では刺入鍼を電極として低周波などの電気刺激を加える。
- エ．使用済み鍼の共用は感染対策上不適切である。

答え・4肢解説

正答：ウ．鍼通電療法では刺入鍼を電極として低周波などの電気刺激を加える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「艾の燃焼熱だけを利用する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼を電極として用い、設定した電気刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を一切刺入せず視覚刺激だけを与える。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼を電極として用い、設定した電気刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「刺入した鍼を電極として用い、設定した電気刺激を加える。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「使用済み鍼を患者間で共用する。」を評価するための説明であり、今回の「刺入した鍼を電極として用い、設定した電気刺激を加える。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼通電療法では刺入鍼を電極として低周波などの電気刺激を加える。鍼通電療法では刺入鍼を電極として低周波などの電気刺激を加える。

Q060

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：標準

特殊鍼法の論点「耳鍼療法」について、「耳介」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．足底だけを対象とする療法ではない。
- イ．胸腔内は耳鍼療法の対象部位ではない。
- ウ．眼球を刺鍼する方法ではない。
- エ．耳鍼療法は耳介の特定部位や反応点を利用する方法である。

答え・4肢解説

正答：エ．耳鍼療法は耳介の特定部位や反応点を利用する方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「足底だけ」を評価するための説明であり、今回の「耳介」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「胸腔内」を評価するための説明であり、今回の「耳介」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「眼球」を評価するための説明であり、今回の「耳介」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「耳介」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：耳鍼療法は耳介の特定部位や反応点を利用する方法である。耳鍼療法は耳介の特定部位や反応点を利用する方法である。

Q061

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：応用

特殊鍼法の論点「頭鍼療法」について、「頭部の一定の領域を選び、そこへ刺鍼刺激を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．頭鍼療法は頭皮上の一定領域などを選択して刺鍼刺激を行う特殊鍼法である。
- イ．耳介を主対象とするのは耳鍼療法である。
- ウ．頭鍼療法は灸法に限定されない。
- エ．胸部深刺を基本とする方法ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．頭鍼療法は頭皮上の一定領域などを選択して刺鍼刺激を行う特殊鍼法である。

ア：正しい。この説明が「頭部の一定の領域を選び、そこへ刺鍼刺激を行う。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず耳介だけへ刺鍼する。」を評価するための説明であり、今回の「頭部の一定の領域を選び、そこへ刺鍼刺激を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚を焼灼する灸法だけを行う。」を評価するための説明であり、今回の「頭部の一定の領域を選び、そこへ刺鍼刺激を行う。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「胸部深刺を基本とする。」を評価するための説明であり、今回の「頭部の一定の領域を選び、そこへ刺鍼刺激を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：頭鍼療法は頭皮上の一定領域などを選択して刺鍼刺激を行う特殊鍼法である。頭鍼療法は頭皮上の一定領域などを選択して刺鍼刺激を行う特殊鍼法である。

Q062

3-2 刺鍼 > 特殊鍼法 | 難易度：応用

特殊鍼法の論点「刺絡療法」について、「皮膚や表在部を専用器具で穿刺し、少量の出血を伴うため血液曝露対策が重要である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．刺絡療法は出血を伴う特殊鍼法であり温灸ではない。
- イ．刺絡療法は微量出血を伴うため、感染防止・血液曝露・鋭利物管理を特に重視する。
- ウ．鍼柄上の艾燃焼は灸頭鍼である。
- エ．血液曝露リスクがあるため標準予防策が重要である。

答え・4肢解説

正答：イ．刺絡療法は微量出血を伴うため、感染防止・血液曝露・鋭利物管理を特に重視する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「出血を絶対に伴わない温灸法である。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚や表在部を専用器具で穿刺し、少量の出血を伴うため血液曝露対策が重要である。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「皮膚や表在部を専用器具で穿刺し、少量の出血を伴うため血液曝露対策が重要である。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄上の艾燃焼だけを目的とする。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚や表在部を専用器具で穿刺し、少量の出血を伴うため血液曝露対策が重要である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「血液に触れる可能性がないので標準予防策は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚や表在部を専用器具で穿刺し、少量の出血を伴うため血液曝露対策が重要である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：刺絡療法は微量出血を伴うため、感染防止・血液曝露・鋭利物管理を特に重視する。刺絡療法は微量出血を伴うため、感染防止・血液曝露・鋭利物管理を特に重視する。

Q063

3-3 灸 > 艾 | 難易度：基礎

艾の論点「ヨモギ」について、「ヨモギ」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．スギは艾の主原料ではない。
- イ．イネは艾の主原料ではない。
- ウ．艾はヨモギの葉を乾燥・加工して作られる。
- エ．マツは艾の主原料ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．艾はヨモギの葉を乾燥・加工して作られる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「スギ」を評価するための説明であり、今回の「ヨモギ」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「イネ」を評価するための説明であり、今回の「ヨモギ」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「ヨモギ」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「マツ」を評価するための説明であり、今回の「ヨモギ」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾はヨモギの葉を乾燥・加工して作られる。艾はヨモギの葉を乾燥・加工して作られる。

Q064

3-3 灸 > 艾 | 難易度：基礎

艾の論点「葉裏の毛茸」について、「葉裏の毛茸」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．根の木質部が艾の主要原料になるわけではない。
- イ．花粉だけから艾を作るわけではない。
- ウ．種子殻だけが主原料ではない。
- エ．ヨモギ葉裏の毛茸などが精製過程で集められ、艾の主要部分となる。

答え・4肢解説

正答：エ．ヨモギ葉裏の毛茸などが精製過程で集められ、艾の主要部分となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「根の木質部だけ」を評価するための説明であり、今回の「葉裏の毛茸」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「花粉だけ」を評価するための説明であり、今回の「葉裏の毛茸」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「種子の殻だけ」を評価するための説明であり、今回の「葉裏の毛茸」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「葉裏の毛茸」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：ヨモギ葉裏の毛茸などが精製過程で集められ、艾の主要部分となる。ヨモギ葉裏の毛茸などが精製過程で集められ、艾の主要部分となる。

Q065

3-3 灸 > 艾 | 難易度：基礎

艾の論点「乾燥と精製」について、「乾燥したヨモギ葉を粉碎・ふるい分けなどして精製する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．艾は乾燥ヨモギ葉を粉碎し、不純物を除きながら毛茸を主体に精製する。
- イ．生葉を水に溶かして作るものではない。
- ウ．根を金属化する工程はない。
- エ．木炭が艾の原料ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．艾は乾燥ヨモギ葉を粉碎し、不純物を除きながら毛茸を主体に精製する。

ア：正しい。この説明が「乾燥したヨモギ葉を粉碎・ふるい分けなどして精製する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「生葉をそのまま水中で溶解して作る。」を評価するための説明であり、今回の「乾燥したヨモギ葉を粉碎・ふるい分けなどして精製する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「ヨモギの根を金属化して作る。」を評価するための説明であり、今回の「乾燥したヨモギ葉を粉碎・ふるい分けなどして精製する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「木炭を溶かして繊維化する。」を評価するための説明であり、今回の「乾燥したヨモギ葉を粉碎・ふるい分けなどして精製する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾は乾燥ヨモギ葉を粉碎し、不純物を除きながら毛茸を主体に精製する。艾は乾燥ヨモギ葉を粉碎し、不純物を除きながら毛茸を主体に精製する。

Q066

3-3 灸 > 艾 | 難易度：基礎

艾の論点「色調と夾雑物」について、「夾雑物が少なく、柔らかくまとまりやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．夾雑物が多いことは高精製度の特徴ではない。
- イ．精製度の高い艾は夾雑物が少なく、細かく柔らかく成形しやすい。
- ウ．湿気は保存性や燃焼性を損なう。
- エ．異物臭は良質艾の指標ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．精製度の高い艾は夾雑物が少なく、細かく柔らかく成形しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「茎片などの夾雑物が多いほど良質である。」を評価するための説明であり、今回の「夾雑物が少なく、柔らかくまとまりやすい。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「夾雑物が少なく、柔らかくまとまりやすい。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「水分が多く湿っているほど良質である。」を評価するための説明であり、今回の「夾雑物が少なく、柔らかくまとまりやすい。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「強い異物臭があるほど良質である。」を評価するための説明であり、今回の「夾雑物が少なく、柔らかくまとまりやすい。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：精製度の高い艾は夾雑物が少なく、細かく柔らかく成形しやすい。精製度の高い艾は夾雑物が少なく、細かく柔らかく成形しやすい。

Q067

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「直接灸用艾」について、「精製度が高く、細かく成形しやすい艾」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．粗い艾は小さな艾炷の成形に不向きである。
- イ．湿った艾は燃焼が不安定になりやすい。
- ウ．直接灸では小さな艾炷を精密に成形するため、精製度が高く柔らかな艾が適する。
- エ．異物混入は安全・品質上不適切である。

答え・4肢解説

正答：ウ．直接灸では小さな艾炷を精密に成形するため、精製度が高く柔らかな艾が適する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「茎や不純物が多く粗い艾」を評価するための説明であり、今回の「精製度が高く、細かく成形しやすい艾」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「湿って固まり燃えにくい艾」を評価するための説明であり、今回の「精製度が高く、細かく成形しやすい艾」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「精製度が高く、細かく成形しやすい艾」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「異物が混入した艾」を評価するための説明であり、今回の「精製度が高く、細かく成形しやすい艾」を支持する根拠にはならない。

総合解説：直接灸では小さな艾炷を精密に成形するため、精製度が高く柔らかな艾が適する。直接灸では小さな艾炷を精密に成形するため、精製度が高く柔らかな艾が適する。

Q068

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「温灸用艾」について、「用途に応じて、直接灸用ほど高精製でない艾が用いられることもある。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．灸法の目的や燃焼特性に応じて艾の等級を使い分ける。
- イ．湿気は保存・燃焼に悪影響を与える。
- ウ．夾雑物が多いことは良好な燃焼管理の条件ではない。
- エ．艾は品質・精製度により用途が異なり、温灸等では直接灸とは異なる等級が用いられることがある。

答え・4肢解説

正答：エ．艾は品質・精製度により用途が異なり、温灸等では直接灸とは異なる等級が用いられることがある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「どの灸法でも艾の品質・精製度は完全に同一でなければならない。」を評価するための説明であり、今回の「用途に応じて、直接灸用ほど高精製でない艾が用いられることもある。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「湿気を含ませた艾だけを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「用途に応じて、直接灸用ほど高精製でない艾が用いられることもある。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「夾雑物が多いほど燃焼管理が容易である。」を評価するための説明であり、今回の「用途に応じて、直接灸用ほど高精製でない艾が用いられることもある。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「用途に応じて、直接灸用ほど高精製でない艾が用いられることもある。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：艾は品質・精製度により用途が異なり、温灸等では直接灸とは異なる等級が用いられることがある。艾は品質・精製度により用途が異なり、温灸等では直接灸とは異なる等級が用いられることがある。

Q069

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「湿気対策」について、「湿気や異物混入を避け、乾燥した清潔な環境で保管する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．艾は吸湿すると燃焼性や品質が変化するため、清潔で乾燥した環境で保存する。
- イ．湿潤状態は燃焼不良や品質劣化につながる。
- ウ．床上保管は汚染・湿気・異物混入の原因となる。
- エ．未使用品と使用済み材料は分けて管理する。

答え・4肢解説

正答：ア．艾は吸湿すると燃焼性や品質が変化するため、清潔で乾燥した環境で保存する。

ア：正しい。この説明が「湿気や異物混入を避け、乾燥した清潔な環境で保管する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「水をかけて常に湿潤状態にする。」を評価するための説明であり、今回の「湿気や異物混入を避け、乾燥した清潔な環境で保管する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「床に直接広げて保管する。」を評価するための説明であり、今回の「湿気や異物混入を避け、乾燥した清潔な環境で保管する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「使用済み艾と未使用艾を混在させる。」を評価するための説明であり、今回の「湿気や異物混入を避け、乾燥した清潔な環境で保管する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾は吸湿すると燃焼性や品質が変化するため、清潔で乾燥した環境で保存する。艾は吸湿すると燃焼性や品質が変化するため、清潔で乾燥した環境で保存する。

Q070

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「艾炷の大きさ」について、「艾炷の大きさや密度」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．名字は燃焼刺激量を決めない。
- イ．艾炷の大きさ、密度、燃焼時間、燃焼させる程度などは温熱刺激量に影響する。
- ウ．時計の形は燃焼特性に関係しない。
- エ．靴の色は灸刺激量に関係しない。

答え・4肢解説

正答：イ．艾炷の大きさ、密度、燃焼時間、燃焼させる程度などは温熱刺激量に影響する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「施術者の名字」を評価するための説明であり、今回の「艾炷の大きさや密度」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「艾炷の大きさや密度」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「治療室の時計の形」を評価するための説明であり、今回の「艾炷の大きさや密度」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の靴の色」を評価するための説明であり、今回の「艾炷の大きさや密度」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾炷の大きさ、密度、燃焼時間、燃焼させる程度などは温熱刺激量に影響する。艾炷の大きさ、密度、燃焼時間、燃焼させる程度などは温熱刺激量に影響する。

Q071

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「成形と燃焼」について、「密度が変わると燃焼速度や熱の伝わり方が変化するため。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．成形で植物繊維が金属に変わることはない。

イ．密度は燃焼条件に影響する。

ウ．艾炷の密度は空気供給や燃焼速度、熱の集中などに影響し、刺激量を変化させる。

エ．締める操作は滅菌操作ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．艾炷の密度は空気供給や燃焼速度、熱の集中などに影響し、刺激量を変化させる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「締め方でヨモギが金属へ変化するため。」を評価するための説明であり、今回の「密度が変わると燃焼速度や熱の伝わり方が変化するため。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「密度と燃焼には一切関係がないため。」を評価するための説明であり、今回の「密度が変わると燃焼速度や熱の伝わり方が変化するため。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「密度が変わると燃焼速度や熱の伝わり方が変化するため。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「締めると艾が必ず無菌化されるため。」を評価するための説明であり、今回の「密度が変わると燃焼速度や熱の伝わり方が変化するため。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾炷の密度は空気供給や燃焼速度、熱の集中などに影響し、刺激量を変化させる。艾炷の密度は空気供給や燃焼速度、熱の集中などに影響し、刺激量を変化させる。

Q072

3-3 灸 > 艾 | 難易度：標準

艾の論点「品質選択」について、「繊維が細かく、夾雑物が少なく、まとまりやすい艾」が適切とされる根拠はどれか。

ア．粗い艾は小さな艾炷の精密成形に向かない。

イ．湿気は燃焼を不安定にする。

ウ．異物混入品は使用すべきでない。

エ．細かな直接灸では精製度が高く成形性の良い艾が熱量調整に適する。

答え・4肢解説

正答：エ．細かな直接灸では精製度が高く成形性の良い艾が熱量調整に適する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「茎片が多く成形しにくい艾」を評価するための説明であり、今回の「繊維が細かく、夾雑物が少なく、まとまりやすい艾」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「湿気を多く含み燃えにくい艾」を評価するための説明であり、今回の「繊維が細かく、夾雑物が少なく、まとまりやすい艾」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「異物が混入している艾」を評価するための説明であり、今回の「繊維が細かく、夾雑物が少なく、まとまりやすい艾」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「繊維が細かく、夾雑物が少なく、まとまりやすい艾」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：細かな直接灸では精製度が高く成形性の良い艾が熱量調整に適する。細かな直接灸では精製度が高く成形性の良い艾が熱量調整に適する。

Q073

3-3 灸 > 艾 | 難易度：応用

艾の論点「品質劣化」について、「品質が保証できないため使用を避け、適切に管理された艾へ交換する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．吸湿や異臭は品質劣化・汚染の可能性がある、安全性と燃焼特性を保証できない。
- イ．患者皮膚上を品質確認の試験場所にしてはならない。
- ウ．異臭は治療効果の指標ではない。
- エ．品質不良を艾量増加で補うことは危険である。

答え・4肢解説

正答：ア．吸湿や異臭は品質劣化・汚染の可能性がある、安全性と燃焼特性を保証できない。

ア：正しい。この説明が「品質が保証できないため使用を避け、適切に管理された艾へ交換する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「十分乾くまで患者の皮膚上で試し燃焼する。」を評価するための説明であり、今回の「品質が保証できないため使用を避け、適切に管理された艾へ交換する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「異臭があるほど治療効果が高いと判断する。」を評価するための説明であり、今回の「品質が保証できないため使用を避け、適切に管理された艾へ交換する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「熱量を上げるため大量に皮膚へ載せる。」を評価するための説明であり、今回の「品質が保証できないため使用を避け、適切に管理された艾へ交換する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：吸湿や異臭は品質劣化・汚染の可能性がある、安全性と燃焼特性を保証できない。吸湿や異臭は品質劣化・汚染の可能性がある、安全性と燃焼特性を保証できない。

Q074

3-3 灸 > 艾 | 難易度：応用

艾の論点「燃焼条件の統合」について、「艾の品質、艾炷の大きさ・密度、燃焼させる程度などをそろえる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．品質を無作為に変えると刺激量の再現性が低下する。
- イ．灸刺激量は材料と燃焼条件の影響を受けるため、艾・艾炷・燃焼条件を適切に管理する。
- ウ．大きさが変わると熱量も変化する。
- エ．燃焼状態や患者反応を観察して調整する必要がある。

答え・4肢解説

正答：イ．灸刺激量は材料と燃焼条件の影響を受けるため、艾・艾炷・燃焼条件を適切に管理する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者ごとに艾の品質を無作為に変える。」を評価するための説明であり、今回の「艾の品質、艾炷の大きさ・密度、燃焼させる程度などをそろえる。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「艾の品質、艾炷の大きさ・密度、燃焼させる程度などをそろえる。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「艾炷の大きさを毎壮大幅に変える。」を評価するための説明であり、今回の「艾の品質、艾炷の大きさ・密度、燃焼させる程度などをそろえる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「燃焼状態を観察せず、同じ時間だけ放置する。」を評価するための説明であり、今回の「艾の品質、艾炷の大きさ・密度、燃焼させる程度などをそろえる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：灸刺激量は材料と燃焼条件の影響を受けるため、艾・艾炷・燃焼条件を適切に管理する。灸刺激量は材料と燃焼条件の影響を受けるため、艾・艾炷・燃焼条件を適切に管理する。

Q075

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：基礎

直接灸の論点「有痕灸」について、「有痕灸」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．温筒灸は無痕灸として用いられる。
- イ．棒灸は通常、皮膚から離して温熱刺激を与える。
- ウ．有痕灸は皮膚へ直接強い熱刺激を与え、灸痕を形成し得る灸法である。
- エ．隔物灸は皮膚との間に物質を介在させる無痕灸である。

答え・4肢解説

正答：ウ．有痕灸は皮膚へ直接強い熱刺激を与え、灸痕を形成し得る灸法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「温筒灸」を評価するための説明であり、今回の「有痕灸」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「棒灸」を評価するための説明であり、今回の「有痕灸」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「有痕灸」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「隔物灸」を評価するための説明であり、今回の「有痕灸」を支持する根拠にはならない。

総合解説：有痕灸は皮膚へ直接強い熱刺激を与え、灸痕を形成し得る灸法である。有痕灸は皮膚へ直接強い熱刺激を与え、灸痕を形成し得る灸法である。

Q076

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：基礎

直接灸の論点「透熱灸」について、「小さな艾炷を皮膚上で燃焼させ、比較的強い直接熱刺激を与える。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．棒灸は直接灸ではない。
- イ．それは鍼通電療法である。
- ウ．それは円皮鍼・耳鍼に関する操作である。
- エ．透熱灸は皮膚上の小艾炷を燃焼させ、熱を透達させる有痕灸の一種である。

答え・4肢解説

正答：エ．透熱灸は皮膚上の小艾炷を燃焼させ、熱を透達させる有痕灸の一種である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚から遠く離れた棒灸だけを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「小さな艾炷を皮膚上で燃焼させ、比較的強い直接熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼へ低周波通電する。」を評価するための説明であり、今回の「小さな艾炷を皮膚上で燃焼させ、比較的強い直接熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「耳介に円皮鍼を固定する。」を評価するための説明であり、今回の「小さな艾炷を皮膚上で燃焼させ、比較的強い直接熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「小さな艾炷を皮膚上で燃焼させ、比較的強い直接熱刺激を与える。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：透熱灸は皮膚上の小艾炷を燃焼させ、熱を透達させる有痕灸の一種である。透熱灸は皮膚上の小艾炷を燃焼させ、熱を透達させる有痕灸の一種である。

Q077

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：基礎

直接灸の論点「焦灼灸」について、「局所組織を強く加熱して焼灼する目的で行う有痕灸である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．焦灼灸は局所を強く焼灼することを目的とする有痕灸として分類される。
- イ．温感前に除去するのは知熱灸の考え方に近い。
- ウ．介在物を用いるのは隔物灸である。
- エ．皮膚から離して行うのは棒灸など無痕灸の方法である。

答え・4肢解説

正答：ア．焦灼灸は局所を強く焼灼することを目的とする有痕灸として分類される。

ア：正しい。この説明が「局所組織を強く加熱して焼灼する目的で行う有痕灸である。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「温感が出る前に必ず艾を除去する。」を評価するための説明であり、今回の「局所組織を強く加熱して焼灼する目的で行う有痕灸である。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「生姜などを介在させて行う。」を評価するための説明であり、今回の「局所組織を強く加熱して焼灼する目的で行う有痕灸である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚から離れた輻射熱だけを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「局所組織を強く加熱して焼灼する目的で行う有痕灸である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：焦灼灸は局所を強く焼灼することを目的とする有痕灸として分類される。焦灼灸は局所を強く焼灼することを目的とする有痕灸として分類される。

Q078

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：標準

直接灸の論点「打膿灸」について、「比較的大きな艾炷を用いて灸痕をつくり、化膿を伴う経過をとる方法である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．強い直接熱刺激を用いる方法である。
- イ．打膿灸は有痕灸の一種で、意図的に灸痕を形成し、化膿を伴う経過をとる伝統的方法である。
- ウ．鍼柄へ艾を付けるのは灸頭鍼である。
- エ．耳介に限定される方法ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．打膿灸は有痕灸の一種で、意図的に灸痕を形成し、化膿を伴う経過をとる伝統的方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚に一切熱を伝えない方法である。」を評価するための説明であり、今回の「比較的大きな艾炷を用いて灸痕をつくり、化膿を伴う経過をとる方法である。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「比較的大きな艾炷を用いて灸痕をつくり、化膿を伴う経過をとる方法である。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼柄へ艾を取り付ける方法である。」を評価するための説明であり、今回の「比較的大きな艾炷を用いて灸痕をつくり、化膿を伴う経過をとる方法である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「耳介だけに行う方法である。」を評価するための説明であり、今回の「比較的大きな艾炷を用いて灸痕をつくり、化膿を伴う経過をとる方法である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：打膿灸は有痕灸の一種で、意図的に灸痕を形成し、化膿を伴う経過をとる伝統的方法である。打膿灸は有痕灸の一種で、意図的に灸痕を形成し、化膿を伴う経過をとる伝統的方法である。

Q079

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：標準

直接灸の論点「艾炷サイズ」について、「艾炷を大きくし、燃焼量を増やす。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．艾量減少と早期除去は刺激量を低下させる方向である。
- イ．隔物は直接熱を緩和する方向に働く。
- ウ．艾炷の大きさや燃焼量が増えると、一般に局所へ伝わる熱量は増える。
- エ．燃焼させなければ灸刺激は生じない。

答え・4肢解説

正答：ウ．艾炷の大きさや燃焼量が増えると、一般に局所へ伝わる熱量は増える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「艾炷を小さくし、途中で早く除去する。」を評価するための説明であり、今回の「艾炷を大きくし、燃焼量を増やす。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚との間に厚い隔物を入れる。」を評価するための説明であり、今回の「艾炷を大きくし、燃焼量を増やす。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「艾炷を大きくし、燃焼量を増やす。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「燃焼前に艾を取り除く。」を評価するための説明であり、今回の「艾炷を大きくし、燃焼量を増やす。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：艾炷の大きさや燃焼量が増えると、一般に局所へ伝わる熱量は増える。艾炷の大きさや燃焼量が増えると、一般に局所へ伝わる熱量は増える。

Q080

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：標準

直接灸の論点「熱傷予防」について、「患者の熱感を確認せず、過大な艾炷を反復して燃焼する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．患者反応に応じた調整はリスク低減につながる。
- イ．皮膚観察は安全管理上必要である。
- ウ．適応・禁忌確認は有害事象予防に重要である。
- エ．過大な艾量や反復燃焼を患者反応なしに行うと、過度の熱損傷につながる。

答え・4肢解説

正答：エ．過大な艾量や反復燃焼を患者反応なしに行うと、過度の熱損傷につながる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者反応を確認し刺激量を調整する。」を評価するための説明であり、今回の「患者の熱感を確認せず、過大な艾炷を反復して燃焼する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「施灸部の状態を観察する。」を評価するための説明であり、今回の「患者の熱感を確認せず、過大な艾炷を反復して燃焼する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「適応と禁忌を事前に確認する。」を評価するための説明であり、今回の「患者の熱感を確認せず、過大な艾炷を反復して燃焼する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「患者の熱感を確認せず、過大な艾炷を反復して燃焼する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：過大な艾量や反復燃焼を患者反応なしに行うと、過度の熱損傷につながる。過大な艾量や反復燃焼を患者反応なしに行うと、過度の熱損傷につながる。

Q081

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：標準

直接灸の論点「感覚障害」について、「熱刺激を自覚しにくいいため、熱傷リスクを高く見積もって慎重に適否を判断する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．感覚低下では過熱を自覚しにくく、熱傷が進行する可能性があるため慎重な判断が必要である。

イ．訴えが少ないことは安全を意味しない。

ウ．感覚低下はむしろ熱傷リスクを高め得る。

エ．皮膚状態と患者反応の観察が重要である。

答え・4肢解説

正答：ア．感覚低下では過熱を自覚しにくく、熱傷が進行する可能性があるため慎重な判断が必要である。

ア：正しい。この説明が「熱刺激を自覚しにくいいため、熱傷リスクを高く見積もって慎重に適否を判断する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「熱さを訴えないので通常より強く施灸する。」を評価するための説明であり、今回の「熱刺激を自覚しにくいいため、熱傷リスクを高く見積もって慎重に適否を判断する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「感覚低下があれば熱傷は起こらない。」を評価するための説明であり、今回の「熱刺激を自覚しにくいいため、熱傷リスクを高く見積もって慎重に適否を判断する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者観察は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「熱刺激を自覚しにくいいため、熱傷リスクを高く見積もって慎重に適否を判断する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：感覚低下では過熱を自覚しにくく、熱傷が進行する可能性があるため慎重な判断が必要である。 感覚低下では過熱を自覚しにくく、熱傷が進行する可能性があるため慎重な判断が必要である。

Q082

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：標準

直接灸の論点「化膿予防」について、「灸痕の清潔を保ち、感染徴候の有無を観察する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．不潔な接触は感染リスクを高める。

イ．有痕灸後は局所の清潔を保ち、過度な炎症や感染徴候に注意する。

ウ．増悪する発赤・腫脹・疼痛等は評価が必要である。

エ．不潔な材料は創部感染の危険を高める。

答え・4肢解説

正答：イ．有痕灸後は局所の清潔を保ち、過度な炎症や感染徴候に注意する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「化膿を防ぐため汚染した手で繰り返し触れる。」を評価するための説明であり、今回の「灸痕の清潔を保ち、感染徴候の有無を観察する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「灸痕の清潔を保ち、感染徴候の有無を観察する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「発赤や腫脹が増悪しても放置する。」を評価するための説明であり、今回の「灸痕の清潔を保ち、感染徴候の有無を観察する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「創部へ不潔な材料を貼付する。」を評価するための説明であり、今回の「灸痕の清潔を保ち、感染徴候の有無を観察する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：有痕灸後は局所の清潔を保ち、過度な炎症や感染徴候に注意する。 有痕灸後は局所の清潔を保ち、過度な炎症や感染徴候に注意する。

Q083

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：応用

直接灸の論点「過度な皮膚反応」について、「追加施灸を中止し、熱傷として状態を評価して必要な処置・受診勧奨を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．追加熱刺激は損傷を悪化させる。
- イ．不潔な穿刺は感染リスクを高める。
- ウ．強い疼痛や大きな水疱は熱傷を示すため、刺激を中止し適切な評価・処置を行う。
- エ．有害事象は患者へ説明し、必要な対応を行う。

答え・4肢解説

正答：ウ．強い疼痛や大きな水疱は熱傷を示すため、刺激を中止し適切な評価・処置を行う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「効果が出ている証拠として同部位へさらに施灸する。」を評価するための説明であり、今回の「追加施灸を中止し、熱傷として状態を評価して必要な処置・受診勧奨を行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「水疱を不潔な針で破る。」を評価するための説明であり、今回の「追加施灸を中止し、熱傷として状態を評価して必要な処置・受診勧奨を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「追加施灸を中止し、熱傷として状態を評価して必要な処置・受診勧奨を行う。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「症状を患者に説明せず帰宅させる。」を評価するための説明であり、今回の「追加施灸を中止し、熱傷として状態を評価して必要な処置・受診勧奨を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：強い疼痛や大きな水疱は熱傷を示すため、刺激を中止し適切な評価・処置を行う。
強い疼痛や大きな水疱は熱傷を示すため、刺激を中止し適切な評価・処置を行う。

Q084

3-3 灸 > 直接灸 | 難易度：応用

直接灸の論点「リスクと同意」について、「期待される刺激だけでなく、灸痕・熱傷・色素変化などの可能性も事前に説明する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．予見可能な灸痕や熱傷リスクは説明対象となる。
- イ．侵襲的な施術では適切な説明と同意が必要である。
- ウ．刺激量と効果は単純な比例関係ではなく、過大刺激は有害事象を生む。
- エ．痕を残し得る灸法では、利益と不利益、代替法を含めて説明し患者の理解・同意を得ることが重要である。

答え・4肢解説

正答：エ．痕を残し得る灸法では、利益と不利益、代替法を含めて説明し患者の理解・同意を得ることが重要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「痕が残る可能性は説明しない。」を評価するための説明であり、今回の「期待される刺激だけでなく、灸痕・熱傷・色素変化などの可能性も事前に説明する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「同意は不要で、施術者だけで決める。」を評価するための説明であり、今回の「期待される刺激だけでなく、灸痕・熱傷・色素変化などの可能性も事前に説明する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「強い灸ほど必ず効果が高いと断定する。」を評価するための説明であり、今回の「期待される刺激だけでなく、灸痕・熱傷・色素変化などの可能性も事前に説明する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「期待される刺激だけでなく、灸痕・熱傷・色素変化などの可能性も事前に説明する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：痕を残し得る灸法では、利益と不利益、代替法を含めて説明し患者の理解・同意を得ることが重要である。痕を残し得る灸法では、利益と不利益、代替法を含めて説明し患者の理解・同意を得ることが重要である。

Q085

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：基礎

間接灸の論点「無痕灸」について、「皮膚に強い損傷や灸痕を残さないよう温熱刺激を与える。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．無痕灸は皮膚に灸痕を残さないよう刺激量を調整して温熱刺激を与える。
- イ．焼灼・瘢痕形成は有痕灸の特徴である。
- ウ．化膿を目的としない。
- エ．出血を目的とする灸法ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．無痕灸は皮膚に灸痕を残さないよう刺激量を調整して温熱刺激を与える。

ア：正しい。この説明が「皮膚に強い損傷や灸痕を残さないよう温熱刺激を与える。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず皮膚を焼灼して瘢痕を作る。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚に強い損傷や灸痕を残さないよう温熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず化膿を起こす。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚に強い損傷や灸痕を残さないよう温熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず出血させる。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚に強い損傷や灸痕を残さないよう温熱刺激を与える。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：無痕灸は皮膚に灸痕を残さないよう刺激量を調整して温熱刺激を与える。無痕灸は皮膚に灸痕を残さないよう刺激量を調整して温熱刺激を与える。

Q086

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：基礎

間接灸の論点「知熱灸」について、「患者が熱さを感じた段階などで艾炷を取り除き、過度な熱刺激を避ける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．完全燃焼させることを必須としない。
- イ．知熱灸は温熱を感じた段階で艾を除去するなどして、灸痕を残さない刺激を行う。
- ウ．皮膚切開を伴う方法ではない。
- エ．鍼通電療法ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．知熱灸は温熱を感じた段階で艾を除去するなどして、灸痕を残さない刺激を行う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「艾炷を必ず最後まで皮膚上で燃焼させる。」を評価するための説明であり、今回の「患者が熱さを感じた段階などで艾炷を取り除き、過度な熱刺激を避ける。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「患者が熱さを感じた段階などで艾炷を取り除き、過度な熱刺激を避ける。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚を切開して艾を入れる。」を評価するための説明であり、今回の「患者が熱さを感じた段階などで艾炷を取り除き、過度な熱刺激を避ける。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼へ通電しながら行う。」を評価するための説明であり、今回の「患者が熱さを感じた段階などで艾炷を取り除き、過度な熱刺激を避ける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：知熱灸は温熱を感じた段階で艾を除去するなどして、灸痕を残さない刺激を行う。知熱灸は温熱を感じた段階で艾を除去するなどして、灸痕を残さない刺激を行う。

Q087

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：標準

間接灸の論点「隔物灸」について、「皮膚と艾の間に生姜などの物質を介在させて施灸する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．艾を皮膚内へ埋め込む方法ではない。

イ．それは耳鍼・円皮鍼などの説明である。

ウ．隔物灸は生姜・ニンニク・塩などの介在物を皮膚と艾の間に置いて温熱刺激を調整する。

エ．切開を伴う灸法ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．隔物灸は生姜・ニンニク・塩などの介在物を皮膚と艾の間に置いて温熱刺激を調整する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「艾を皮膚内へ埋め込む。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚と艾の間に生姜などの物質を介在させて施灸する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を耳介へ固定する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚と艾の間に生姜などの物質を介在させて施灸する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「皮膚と艾の間に生姜などの物質を介在させて施灸する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚を直接切開して艾を挿入する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚と艾の間に生姜などの物質を介在させて施灸する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：隔物灸は生姜・ニンニク・塩などの介在物を皮膚と艾の間に置いて温熱刺激を調整する。隔物灸は生姜・ニンニク・塩などの介在物を皮膚と艾の間に置いて温熱刺激を調整する。

Q088

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：標準

間接灸の論点「温灸」について、「皮膚を焼灼せず、比較的穏やかな温熱刺激を与えることを目的とする。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．大きな灸痕形成は無痕灸の目的ではない。

イ．出血を目的とする灸法ではない。

ウ．鍼の折断とは無関係である。

エ．温灸は皮膚に強い損傷を与えず、温熱感を利用する無痕灸の一つである。

答え・4肢解説

正答：エ．温灸は皮膚に強い損傷を与えず、温熱感を利用する無痕灸の一つである。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「必ず大きな灸痕を形成する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を焼灼せず、比較的穏やかな温熱刺激を与えることを目的とする。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「多量出血を目的とする。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を焼灼せず、比較的穏やかな温熱刺激を与えることを目的とする。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「毫鍼を折断することを目的とする。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚を焼灼せず、比較的穏やかな温熱刺激を与えることを目的とする。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「皮膚を焼灼せず、比較的穏やかな温熱刺激を与えることを目的とする。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：温灸は皮膚に強い損傷を与えず、温熱感を利用する無痕灸の一つである。温灸は皮膚に強い損傷を与えず、温熱感を利用する無痕灸の一つである。

Q089

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：標準

間接灸の論点「棒灸」について、「皮膚との距離と患者の熱感を確認しながら温熱刺激を調整する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．棒灸では距離・時間・動かし方で熱量が変化するため、患者反応を確認しながら調整する。
- イ．皮膚へ押し付けると熱傷の危険が高い。
- ウ．患者の熱感と皮膚状態の確認が必要である。
- エ．燃焼中の器具放置は火災リスクとなる。

答え・4肢解説

正答：ア．棒灸では距離・時間・動かし方で熱量が変化するため、患者反応を確認しながら調整する。

ア：正しい。この説明が「皮膚との距離と患者の熱感を確認しながら温熱刺激を調整する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚へ押し付けて必ず炭化させる。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚との距離と患者の熱感を確認しながら温熱刺激を調整する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の熱感を確認せず固定する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚との距離と患者の熱感を確認しながら温熱刺激を調整する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「燃焼中の棒灸を可燃物上に放置する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚との距離と患者の熱感を確認しながら温熱刺激を調整する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：棒灸では距離・時間・動かし方で熱量が変化するため、患者反応を確認しながら調整する。棒灸では距離・時間・動かし方で熱量が変化するため、患者反応を確認しながら調整する。

Q090

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：標準

間接灸の論点「距離と時間」について、「熱源と皮膚との距離、施灸時間、艾量、患者の感受性など。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．姓は温熱刺激量を決めない。
- イ．間接灸では熱源からの距離・時間・艾量・皮膚状態・感受性などで刺激量が変わる。
- ウ．部屋の方角は主な刺激量決定因子ではない。
- エ．施術者の靴の種類は灸刺激量に直接関係しない。

答え・4肢解説

正答：イ．間接灸では熱源からの距離・時間・艾量・皮膚状態・感受性などで刺激量が変わる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者の姓だけ。」を評価するための説明であり、今回の「熱源と皮膚との距離、施灸時間、艾量、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「熱源と皮膚との距離、施灸時間、艾量、患者の感受性など。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「施術室の方角だけ。」を評価するための説明であり、今回の「熱源と皮膚との距離、施灸時間、艾量、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「施術者の靴の種類だけ。」を評価するための説明であり、今回の「熱源と皮膚との距離、施灸時間、艾量、患者の感受性など。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：間接灸では熱源からの距離・時間・艾量・皮膚状態・感受性などで刺激量が変わる。間接灸では熱源からの距離・時間・艾量・皮膚状態・感受性などで刺激量が変わる。

Q091

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：応用

間接灸の論点「低温熱傷」について、「施灸を中止し、皮膚状態を確認して低温熱傷を含む熱損傷を評価する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．自覚熱感が弱くても組織損傷は生じ得る。
- イ．過度の発赤は熱損傷の可能性があり観察が必要である。
- ウ．比較的低温でも長時間の加熱で熱傷が起こり得るため、発赤増強時は中止して評価する。
- エ．異常反応を確認せず追加熱刺激を行うべきではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．比較的低温でも長時間の加熱で熱傷が起こり得るため、発赤増強時は中止して評価する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「熱さの訴えがないのでさらに時間を延長する。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、皮膚状態を確認して低温熱傷を含む熱損傷を評価する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「発赤は無条件に治療効果とみなし観察しない。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、皮膚状態を確認して低温熱傷を含む熱損傷を評価する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「施灸を中止し、皮膚状態を確認して低温熱傷を含む熱損傷を評価する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚状態を確認せず同じ部位へ追加する。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、皮膚状態を確認して低温熱傷を含む熱損傷を評価する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：比較的低温でも長時間の加熱で熱傷が起こり得るため、発赤増強時は中止して評価する。 比較的低温でも長時間の加熱で熱傷が起こり得るため、発赤増強時は中止して評価する。

Q092

3-3 灸 > 間接灸 | 難易度：応用

間接灸の論点「感覚低下と無痕灸」について、「患者の自覚だけに頼らず皮膚を頻回に観察し、刺激量を十分低く設定するか適否を再検討する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．熱源を近づけると熱傷リスクが高まる。
- イ．感覚低下はむしろ熱傷を見逃す危険因子である。
- ウ．長時間の温熱は低温熱傷の危険があり観察が必要である。
- エ．温度感覚低下では熱傷の自覚が遅れるため、客観的な皮膚観察と慎重な刺激量設定が必要である。

答え・4肢解説

正答：エ．温度感覚低下では熱傷の自覚が遅れるため、客観的な皮膚観察と慎重な刺激量設定が必要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「熱さを訴えないため通常より熱源を近づける。」を評価するための説明であり、今回の「患者の自覚だけに頼らず皮膚を頻回に観察し、刺激量を十分低く設定するか適否を再検討する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「感覚低下があれば熱傷しないと判断する。」を評価するための説明であり、今回の「患者の自覚だけに頼らず皮膚を頻回に観察し、刺激量を十分低く設定するか適否を再検討する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「長時間固定しても観察は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「患者の自覚だけに頼らず皮膚を頻回に観察し、刺激量を十分低く設定するか適否を再検討する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「患者の自覚だけに頼らず皮膚を頻回に観察し、刺激量を十分低く設定するか適否を再検討する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：温度感覚低下では熱傷の自覚が遅れるため、客観的な皮膚観察と慎重な刺激量設定が必要である。 温度感覚低下では熱傷の自覚が遅れるため、客観的な皮膚観察と慎重な刺激量設定が必要である。

Q093

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：基礎

鎮痛の論点「A δ /C線維」について、「A δ 線維とC線維」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．侵害受容情報は主に細い有髄A δ 線維と無髄C線維によって伝えられる。
- イ．A α 線維は主に運動や固有感覚に関与する太い線維である。
- ウ．B線維は主に自律神経節前線維で、侵害受容の主経路ではない。
- エ．Ia群線維は筋紡錘由来の固有感覚を主に伝える。

答え・4肢解説

正答：ア．侵害受容情報は主に細い有髄A δ 線維と無髄C線維によって伝えられる。

ア：正しい。この説明が「A δ 線維とC線維」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「A α 線維だけ」を評価するための説明であり、今回の「A δ 線維とC線維」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「B線維だけ」を評価するための説明であり、今回の「A δ 線維とC線維」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「Ia群線維だけ」を評価するための説明であり、今回の「A δ 線維とC線維」を支持する根拠にはならない。

総合解説：侵害受容情報は主に細い有髄A δ 線維と無髄C線維によって伝えられる。侵害受容情報は主に細い有髄A δ 線維と無髄C線維によって伝えられる。

Q094

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：基礎

鎮痛の論点「脊髄後角」について、「脊髄後角」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．前角は主として運動ニューロンを含む。
- イ．侵害受容性求心性入力脊髄後角で二次ニューロンなどへ伝達される。
- ウ．小脳は運動調節が中心で、一次侵害受容線維の最初のシナプス部位ではない。
- エ．下垂体後葉は神経内分泌器官である。

答え・4肢解説

正答：イ．侵害受容性求心性入力は脊髄後角で二次ニューロンなどへ伝達される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「脊髄前角だけ」を評価するための説明であり、今回の「脊髄後角」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「脊髄後角」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「小脳皮質」を評価するための説明であり、今回の「脊髄後角」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「脳下垂体後葉」を評価するための説明であり、今回の「脊髄後角」を支持する根拠にはならない。

総合解説：侵害受容性求心性入力は脊髄後角で二次ニューロンなどへ伝達される。侵害受容性求心性入力は脊髄後角で二次ニューロンなどへ伝達される。

Q095

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：基礎

鎮痛の論点「オピオイド系」について、「内因性オピオイドペプチド」が適切とされる根拠はどれか。

ア．インスリンは糖代謝調節ホルモンで、鍼鎮痛の主要機序として扱われない。

イ．甲状腺ホルモンは代謝調節が主作用である。

ウ．鍼・鍼通電による鎮痛には、エンドルフィンなど内因性オピオイド系の関与が研究されている。

エ．胆汁酸は消化・脂質吸収などに関係し、主要な鎮痛伝達物質ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．鍼・鍼通電による鎮痛には、エンドルフィンなど内因性オピオイド系の関与が研究されている。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「インスリンだけ」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイドペプチド」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「甲状腺ホルモンだけ」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイドペプチド」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「内因性オピオイドペプチド」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「胆汁酸だけ」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイドペプチド」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼・鍼通電による鎮痛には、エンドルフィンなど内因性オピオイド系の関与が研究されている。鍼・鍼通電による鎮痛には、エンドルフィンなど内因性オピオイド系の関与が研究されている。

Q096

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：標準

鎮痛の論点「ナロキソン」について、「内因性オピオイド系が鎮痛機序の一部に関与する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．鎮痛機序は単一ではなく、末梢・脊髄・脳幹など複数機構が関与する。

イ．侵害受容情報は脊髄後角などを経て上行する。

ウ．鍼通電は全身麻酔を必然的に起こすものではない。

エ．ナロキソンはオピオイド受容体拮抗薬であり、その鎮痛減弱はオピオイド系関与を支持する。

答え・4肢解説

正答：エ．ナロキソンはオピオイド受容体拮抗薬であり、その鎮痛減弱はオピオイド系関与を支持する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼鎮痛はすべて末梢血流だけで説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイド系が鎮痛機序の一部に関与する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「痛覚伝導は脊髄を通らない。」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイド系が鎮痛機序の一部に関与する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼通電は必ず全身麻酔を生じる。」を評価するための説明であり、今回の「内因性オピオイド系が鎮痛機序の一部に関与する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「内因性オピオイド系が鎮痛機序の一部に関与する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：ナロキソンはオピオイド受容体拮抗薬であり、その鎮痛減弱はオピオイド系関与を支持する。ナロキソンはオピオイド受容体拮抗薬であり、その鎮痛減弱はオピオイド系関与を支持する。

Q097

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：標準

鎮痛の論点「下行性抑制」について、「脳幹などから脊髄後角へ作用し、侵害受容情報の伝達を抑制する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．下行性抑制系は脳幹などから脊髄後角に作用し、痛覚入力伝達の伝達を抑制する。
- イ．主作用は侵害受容伝達の抑制であり、末梢へ痛みを新生する系ではない。
- ウ．骨格筋収縮だけを制御する系ではない。
- エ．視覚系のフィードバック機構ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．下行性抑制系は脳幹などから脊髄後角に作用し、痛覚入力伝達の伝達を抑制する。

ア：正しい。この説明が「脳幹などから脊髄後角へ作用し、侵害受容情報の伝達を抑制する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「脊髄後角から末梢へ痛みを新たに作る。」を評価するための説明であり、今回の「脳幹などから脊髄後角へ作用し、侵害受容情報の伝達を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「骨格筋の収縮だけを増強する。」を評価するための説明であり、今回の「脳幹などから脊髄後角へ作用し、侵害受容情報の伝達を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「視覚情報だけを網膜へ戻す。」を評価するための説明であり、今回の「脳幹などから脊髄後角へ作用し、侵害受容情報の伝達を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：下行性抑制系は脳幹などから脊髄後角に作用し、痛覚入力伝達の伝達を抑制する。下行性抑制系は脳幹などから脊髄後角に作用し、痛覚入力伝達の伝達を抑制する。

Q098

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：標準

鎮痛の論点「PAG」について、「中脳水道周囲灰白質」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．一次視覚野は視覚処理が主機能である。
- イ．中脳水道周囲灰白質（PAG）は下行性疼痛調節に重要な中枢の一つである。
- ウ．小脳虫部は姿勢・運動調節に重要だが、代表的な下行性疼痛抑制中枢ではない。
- エ．嗅球は嗅覚情報処理が主である。

答え・4肢解説

正答：イ．中脳水道周囲灰白質（PAG）は下行性疼痛調節に重要な中枢の一つである。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「一次視覚野だけ」を評価するための説明であり、今回の「中脳水道周囲灰白質」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「中脳水道周囲灰白質」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「小脳虫部だけ」を評価するための説明であり、今回の「中脳水道周囲灰白質」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「嗅球だけ」を評価するための説明であり、今回の「中脳水道周囲灰白質」を支持する根拠にはならない。

総合解説：中脳水道周囲灰白質（PAG）は下行性疼痛調節に重要な中枢の一つである。中脳水道周囲灰白質（PAG）は下行性疼痛調節に重要な中枢の一つである。

Q099

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：標準

鎮痛の論点「ゲートコントロール」について、「太い求心性線維からの入力などが脊髄後角で侵害受容情報の伝達を抑えることがある。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．痛覚伝達は脊髄後角などで調節を受ける。
- イ．痛覚は神経系の侵害受容処理を中心に生じる。
- ウ．ゲートコントロール説では脊髄後角の神経回路による痛覚入力の調節が重視される。
- エ．線維径や髄鞘の有無により伝導速度は異なる。

答え・4肢解説

正答：ウ．ゲートコントロール説では脊髄後角の神経回路による痛覚入力の調節が重視される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「侵害受容情報は末梢で一切調節されない。」を評価するための説明であり、今回の「太い求心性線維からの入力などが脊髄後角で侵害受容情報の伝達を抑えることがある。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「痛みは内分泌系だけで生じる。」を評価するための説明であり、今回の「太い求心性線維からの入力などが脊髄後角で侵害受容情報の伝達を抑えることがある。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「太い求心性線維からの入力などが脊髄後角で侵害受容情報の伝達を抑えることがある。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての感覚線維は同じ伝導速度である。」を評価するための説明であり、今回の「太い求心性線維からの入力などが脊髄後角で侵害受容情報の伝達を抑えることがある。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：ゲートコントロール説では脊髄後角の神経回路による痛覚入力の調節が重視される。ゲートコントロール説では脊髄後角の神経回路による痛覚入力の調節が重視される。

Q100

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：標準

鎮痛の論点「DNIC/CPM」について、「ある部位への侵害刺激が、別部位からの侵害受容応答を抑制する現象を含む。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．名称どおり侵害受容反応の抑制を扱う。
- イ．痛覚調節に関する神経機構であり運動ニューロンだけの反射ではない。
- ウ．血液凝固機構ではない。
- エ．広汎性侵害抑制調節は、別部位の侵害刺激により侵害受容処理が抑制される現象として説明される。

答え・4肢解説

正答：エ．広汎性侵害抑制調節は、別部位の侵害刺激により侵害受容処理が抑制される現象として説明される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「同じ刺激で必ず痛みが増幅する現象だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「ある部位への侵害刺激が、別部位からの侵害受容応答を抑制する現象を含む。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「運動ニューロンだけに起こる反射である。」を評価するための説明であり、今回の「ある部位への侵害刺激が、別部位からの侵害受容応答を抑制する現象を含む。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血液凝固だけを調節する機構である。」を評価するための説明であり、今回の「ある部位への侵害刺激が、別部位からの侵害受容応答を抑制する現象を含む。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「ある部位への侵害刺激が、別部位からの侵害受容応答を抑制する現象を含む。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：広汎性侵害抑制調節は、別部位の侵害刺激により侵害受容処理が抑制される現象として説明される。広汎性侵害抑制調節は、別部位の侵害刺激により侵害受容処理が抑制される現象として説明される。

Q101

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：応用

鎮痛の論点「多層性鎮痛」について、「末梢受容、脊髄後角、中枢性下行抑制、内因性オピオイドなど複数機構が関与し得る。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．鍼鎮痛は単一機構ではなく、末梢・脊髄・脳幹・神経化学的機構を含む多層的な調節として研究されている。

イ．単一物質だけで全てを説明するのは不適切である。

ウ．局所血流や皮膚温だけでは中枢性鎮痛機序を説明できない。

エ．刺激条件や個体差により反応は異なる。

答え・4肢解説

正答：ア．鍼鎮痛は単一機構ではなく、末梢・脊髄・脳幹・神経化学的機構を含む多層的な調節として研究されている。

ア：正しい。この説明が「末梢受容、脊髄後角、中枢性下行抑制、内因性オピオイドなど複数機構が関与し得る。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「単一のホルモンだけですべて説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「末梢受容、脊髄後角、中枢性下行抑制、内因性オピオイドなど複数機構が関与し得る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「局所の皮膚温変化だけですべて説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「末梢受容、脊髄後角、中枢性下行抑制、内因性オピオイドなど複数機構が関与し得る。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼刺激がなくても必ず同程度の鎮痛が起こる。」を評価するための説明であり、今回の「末梢受容、脊髄後角、中枢性下行抑制、内因性オピオイドなど複数機構が関与し得る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：鍼鎮痛は単一機構ではなく、末梢・脊髄・脳幹・神経化学的機構を含む多層的な調節として研究されている。鍼鎮痛は単一機構ではなく、末梢・脊髄・脳幹・神経化学的機構を含む多層的な調節として研究されている。

Q102

3-4 生体反応 > 鎮痛 | 難易度：応用

鎮痛の論点「機序と臨床効果」について、「鎮痛機序の一端を示すが、すべての患者・疾患で同じ臨床効果を保証するものではない。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．種差や病態差があり、効果量をそのまま人へ外挿できない。

イ．基礎研究は機序理解に重要だが、臨床効果の大きさや適応は別途臨床研究で評価する必要がある。

ウ．複数の鎮痛機構が並存し得る。

エ．機序が解明されても安全管理は必要である。

答え・4肢解説

正答：イ．基礎研究は機序理解に重要だが、臨床効果の大きさや適応は別途臨床研究で評価する必要がある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「動物で確認されれば人でも効果量は必ず同一である。」を評価するための説明であり、今回の「鎮痛機序の一端を示すが、すべての患者・疾患で同じ臨床効果を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「鎮痛機序の一端を示すが、すべての患者・疾患で同じ臨床効果を保証するものではない。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「一つの機序が示されれば他の機序は否定される。」を評価するための説明であり、今回の「鎮痛機序の一端を示すが、すべての患者・疾患で同じ臨床効果を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「機序研究は安全性評価を不要にする。」を評価するための説明であり、今回の「鎮痛機序の一端を示すが、すべての患者・疾患で同じ臨床効果を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：基礎研究は機序理解に重要だが、臨床効果の大きさや適応は別途臨床研究で評価する必要がある。基礎研究は機序理解に重要だが、臨床効果の大きさや適応は別途臨床研究で評価する必要がある。

Q103

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：基礎

自律神経の論点「反射弓」について、「体性感覚入力が中枢を介して自律神経出力を変化させる反射である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．体性—自律神経反射は自律神経出力の変化を含む。
- イ．視覚刺激に限定されない。
- ウ．皮膚・筋などの体性感覚入力が中枢神経系を介し、自律神経活動に影響する反射をいう。
- エ．反射は意識的随意運動である必要はない。

答え・4肢解説

正答：ウ．皮膚・筋などの体性感覚入力中枢神経系を介し、自律神経活動に影響する反射をいう。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「自律神経入力骨格筋だけを直接収縮させる反射である。」を評価するための説明であり、今回の「体性感覚入力中枢を介して自律神経出力を変化させる反射である。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「視覚刺激だけで起こる反射である。」を評価するための説明であり、今回の「体性感覚入力中枢を介して自律神経出力を変化させる反射である。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「体性感覚入力中枢を介して自律神経出力を変化させる反射である。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「内分泌器官を介さず必ず意識的に起こる反応である。」を評価するための説明であり、今回の「体性感覚入力中枢を介して自律神経出力を変化させる反射である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：皮膚・筋などの体性感覚入力中枢神経系を介し、自律神経活動に影響する反射をいう。皮膚・筋などの体性感覚入力中枢神経系を介し、自律神経活動に影響する反射をいう。

Q104

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：基礎

自律神経の論点「心拍調節」について、「心拍数の増加」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．交感神経増加は通常心拍を促進する。
- イ．正常な交感神経作用は完全房室ブロックを起こすものではない。
- ウ．交感神経は心筋収縮力を高める方向に働く。
- エ．交感神経活動は一般に心拍数や心収縮力を増加させる方向に働く。

答え・4肢解説

正答：エ．交感神経活動は一般に心拍数や心収縮力を増加させる方向に働く。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「心拍数の必然的停止」を評価するための説明であり、今回の「心拍数の増加」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「房室伝導の必然的完全遮断」を評価するための説明であり、今回の「心拍数の増加」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「心筋収縮の完全消失」を評価するための説明であり、今回の「心拍数の増加」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「心拍数の増加」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：交感神経活動は一般に心拍数や心収縮力を増加させる方向に働く。交感神経活動は一般に心拍数や心収縮力を増加させる方向に働く。

Q105

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：基礎

自律神経の論点「迷走神経」について、「迷走神経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．心臓への副交感神経線維は主として迷走神経を通る。
- イ．坐骨神経は下肢の主要な体性神経である。
- ウ．橈骨神経は上肢の体性神経である。
- エ．大腿神経は下肢前面に分布する体性神経である。

答え・4肢解説

正答：ア．心臓への副交感神経線維は主として迷走神経を通る。

ア：正しい。この説明が「迷走神経」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「坐骨神経」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「橈骨神経」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「大腿神経」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：心臓への副交感神経線維は主として迷走神経を通る。心臓への副交感神経線維は主として迷走神経を通る。

Q106

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：標準

自律神経の論点「交感神経—副腎髄質系」について、「交感神経—副腎髄質系」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．下垂体後葉だけで緊急反応全体を説明できない。
- イ．緊急反応では交感神経活動と副腎髄質からのカテコールアミン分泌が重要である。
- ウ．錐体路は主に随意運動に関与する。
- エ．視覚伝導系は緊急反応の主要な自律出力系ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．緊急反応では交感神経活動と副腎髄質からのカテコールアミン分泌が重要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「視床下部—下垂体後葉だけ」を評価するための説明であり、今回の「交感神経—副腎髄質系」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「交感神経—副腎髄質系」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「錐体路だけ」を評価するための説明であり、今回の「交感神経—副腎髄質系」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「網膜—視神経系だけ」を評価するための説明であり、今回の「交感神経—副腎髄質系」を支持する根拠にはならない。

総合解説：緊急反応では交感神経活動と副腎髄質からのカテコールアミン分泌が重要である。緊急反応では交感神経活動と副腎髄質からのカテコールアミン分泌が重要である。

Q107

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：標準

自律神経の論点「刺激条件」について、「刺激部位や強度、個体の状態などにより反応の方向や大きさが異なり得る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．部位特異性が研究されている。
- イ．刺激強度によって異なる経路が動員されることがある。
- ウ．体性—自律神経反射は刺激条件や体部位、個体状態によって異なる反応を示し得る。
- エ．生体の状態や感受性も反応に影響し得る。

答え・4肢解説

正答：ウ．体性—自律神経反射は刺激条件や体部位、個体状態によって異なる反応を示し得る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「どの部位でも必ず同じ反応になる。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度、個体の状態などにより反応の方向や大きさが異なり得る。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「弱刺激でも強刺激でも自律神経反応は完全に同一である。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度、個体の状態などにより反応の方向や大きさが異なり得る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「刺激部位や強度、個体の状態などにより反応の方向や大きさが異なり得る。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の状態は反応に影響しない。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度、個体の状態などにより反応の方向や大きさが異なり得る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：体性—自律神経反射は刺激条件や体部位、個体状態によって異なる反応を示し得る。体性—自律神経反射は刺激条件や体部位、個体状態によって異なる反応を示し得る。

Q108

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：標準

自律神経の論点「部位特異性」について、「動物実験では刺激部位により異なる自律神経経路が動員されることが示されている。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．部位特異性を示す実験報告がある。
- イ．交感神経経路が関与する条件もある。
- ウ．自律神経反射は国家試験出題基準にも含まれる研究対象である。
- エ．動物研究では体部位と刺激強度に応じて、迷走神経性や交感神経性など異なる反射経路が動員される例が示されている。

答え・4肢解説

正答：エ．動物研究では体部位と刺激強度に応じて、迷走神経性や交感神経性など異なる反射経路が動員される例が示されている。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「刺激部位は自律神経応答に一切関係しないことが証明されている。」を評価するための説明であり、今回の「動物実験では刺激部位により異なる自律神経経路が動員されることが示されている。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての刺激が必ず迷走神経だけを興奮させる。」を評価するための説明であり、今回の「動物実験では刺激部位により異なる自律神経経路が動員されることが示されている。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼通電は自律神経に影響しない。」を評価するための説明であり、今回の「動物実験では刺激部位により異なる自律神経経路が動員されることが示されている。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「動物実験では刺激部位により異なる自律神経経路が動員されることが示されている。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：動物研究では体部位と刺激強度に応じて、迷走神経性や交感神経性など異なる反射経路が動員される例が示されている。動物研究では体部位と刺激強度に応じて、迷走神経性や交感神経性など異なる反射経路が動員される例が示されている。

Q109

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：標準

自律神経の論点「血管調節」について、「自律神経性血管調節と局所性調節の双方」が適切とされる根拠はどれか。

ア．末梢血流は自律神経性の血管調節に加え、局所代謝や軸索反射など複数要因の影響を受ける。

イ．血流調節は骨格筋運動だけでは説明できない。

ウ．赤血球数は酸素運搬に重要だが、急性の血管径調節の全てではない。

エ．視覚情報だけが末梢血流を決めるわけではない。

答え・4肢解説

正答：ア．末梢血流は自律神経性の血管調節に加え、局所代謝や軸索反射など複数要因の影響を受ける。

ア：正しい。この説明が「自律神経性血管調節と局所性調節の双方」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「骨格筋運動だけ」を評価するための説明であり、今回の「自律神経性血管調節と局所性調節の双方」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「赤血球数だけ」を評価するための説明であり、今回の「自律神経性血管調節と局所性調節の双方」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「視覚情報だけ」を評価するための説明であり、今回の「自律神経性血管調節と局所性調節の双方」を支持する根拠にはならない。

総合解説：末梢血流は自律神経性の血管調節に加え、局所代謝や軸索反射など複数要因の影響を受ける。末梢血流は自律神経性の血管調節に加え、局所代謝や軸索反射など複数要因の影響を受ける。

Q110

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：応用

自律神経の論点「HRV」について、「呼吸、姿勢、測定時間、薬剤などの影響も受けるため、条件をそろえて解釈する必要がある。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．単一指標だけで自律神経機能全体を断定するのは不適切である。

イ．HRVは自律神経活動の一指標だが、呼吸・姿勢・時刻・薬剤などの交絡を受ける。

ウ．呼吸性変動はHRVに大きく関与する。

エ．姿勢や薬剤は心拍・自律神経指標に影響する。

答え・4肢解説

正答：イ．HRVは自律神経活動の一指標だが、呼吸・姿勢・時刻・薬剤などの交絡を受ける。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「HRVだけで自律神経機能の全てを完全に断定できる。」を評価するための説明であり、今回の「呼吸、姿勢、測定時間、薬剤などの影響も受けるため、条件をそろえて解釈する必要がある。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「呼吸、姿勢、測定時間、薬剤などの影響も受けるため、条件をそろえて解釈する必要がある。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「呼吸数はHRVに影響しない。」を評価するための説明であり、今回の「呼吸、姿勢、測定時間、薬剤などの影響も受けるため、条件をそろえて解釈する必要がある。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「姿勢や薬剤の影響は考慮不要である。」を評価するための説明であり、今回の「呼吸、姿勢、測定時間、薬剤などの影響も受けるため、条件をそろえて解釈する必要がある。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：HRVは自律神経活動の一指標だが、呼吸・姿勢・時刻・薬剤などの交絡を受ける。HRVは自律神経活動の一指標だが、呼吸・姿勢・時刻・薬剤などの交絡を受ける。

Q111

3-4 生体反応 > 自律神経 | 難易度：応用

自律神経の論点「研究解釈」について、「その条件で自律神経系への影響を示唆するが、全患者で同じ方向の変化を保証するものではない。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．単一研究から全疾患への効果を断定できない。

イ．生理指標の変化と臨床的治癒は同義ではない。

ウ．生理指標の変化は機序を示す手掛かりだが、臨床効果や一般化可能性は研究デザインと再現性を踏まえて判断する。

エ．刺激条件・対照群・盲検等は解釈に重要である。

答え・4肢解説

正答：ウ．生理指標の変化は機序を示す手掛かりだが、臨床効果や一般化可能性は研究デザインと再現性を踏まえて判断する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「一つの研究で全疾患への効果が確定する。」を評価するための説明であり、今回の「その条件で自律神経系への影響を示唆するが、全患者で同じ方向の変化を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「自律神経指標が変われば必ず症状が治癒する。」を評価するための説明であり、今回の「その条件で自律神経系への影響を示唆するが、全患者で同じ方向の変化を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「その条件で自律神経系への影響を示唆するが、全患者で同じ方向の変化を保証するものではない。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「刺激条件や対照群の設定は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「その条件で自律神経系への影響を示唆するが、全患者で同じ方向の変化を保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：生理指標の変化は機序を示す手掛かりだが、臨床効果や一般化可能性は研究デザインと再現性を踏まえて判断する。生理指標の変化は機序を示す手掛かりだが、臨床効果や一般化可能性は研究デザインと再現性を踏まえて判断する。

Q112

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：基礎

免疫の論点「免疫の基本」について、「好中球」が適切とされる根拠はどれか。

ア．赤血球は主に酸素運搬を担う。

イ．骨格筋細胞は免疫担当細胞ではない。

ウ．水晶体細胞は免疫担当細胞ではない。

エ．好中球は自然免疫の主要な食細胞の一つである。

答え・4肢解説

正答：エ．好中球は自然免疫の主要な食細胞の一つである。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「赤血球」を評価するための説明であり、今回の「好中球」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「骨格筋細胞」を評価するための説明であり、今回の「好中球」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「水晶体細胞」を評価するための説明であり、今回の「好中球」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「好中球」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：好中球は自然免疫の主要な食細胞の一つである。好中球は自然免疫の主要な食細胞の一つである。

Q113

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：基礎

免疫の論点「リンパ球」について、「T細胞とB細胞」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．T細胞とB細胞は抗原特異的な獲得免疫の中心を担う。
- イ．赤血球は酸素運搬、血小板は止血が主機能である。
- ウ．骨芽細胞と破骨細胞は骨代謝に関与する。
- エ．筋紡錘と腱器官は固有感覚受容器である。

答え・4肢解説

正答：ア．T細胞とB細胞は抗原特異的な獲得免疫の中心を担う。

ア：正しい。この説明が「T細胞とB細胞」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「赤血球と血小板」を評価するための説明であり、今回の「T細胞とB細胞」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「骨芽細胞と破骨細胞」を評価するための説明であり、今回の「T細胞とB細胞」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「筋紡錘と腱器官」を評価するための説明であり、今回の「T細胞とB細胞」を支持する根拠にはならない。

総合解説：T細胞とB細胞は抗原特異的な獲得免疫の中心を担う。T細胞とB細胞は抗原特異的な獲得免疫の中心を担う。

Q114

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：基礎

免疫の論点「サイトカイン」について、「免疫細胞などが産生し、細胞間の情報伝達に関与するタンパク質群である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．それは髄鞘などの説明に近い。
- イ．サイトカインは免疫・炎症反応などで細胞間シグナルとして働くタンパク質群である。
- ウ．赤血球の酸素運搬タンパク質はヘモグロビンである。
- エ．骨の無機成分は主にリン酸カルシウムである。

答え・4肢解説

正答：イ．サイトカインは免疫・炎症反応などで細胞間シグナルとして働くタンパク質群である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「神経線維を覆う脂質だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「免疫細胞などが産生し、細胞間の情報伝達に関与するタンパク質群である。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「免疫細胞などが産生し、細胞間の情報伝達に関与するタンパク質群である。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「赤血球内の酸素運搬タンパク質だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「免疫細胞などが産生し、細胞間の情報伝達に関与するタンパク質群である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「骨の無機塩だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「免疫細胞などが産生し、細胞間の情報伝達に関与するタンパク質群である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：サイトカインは免疫・炎症反応などで細胞間シグナルとして働くタンパク質群である。サイトカインは免疫・炎症反応などで細胞間シグナルとして働くタンパク質群である。

Q115

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：標準

免疫の論点「TNF- α 」について、「TNF- α 」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．アルブミンは主要な血漿タンパク質である。
- イ．ヘモグロビンは酸素運搬タンパク質である。
- ウ．TNF- α は炎症反応の促進に関与する代表的サイトカインである。
- エ．トロポニンCは筋収縮調節タンパク質である。

答え・4肢解説

正答：ウ．TNF- α は炎症反応の促進に関与する代表的サイトカインである。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「アルブミン」を評価するための説明であり、今回の「TNF- α 」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「ヘモグロビン」を評価するための説明であり、今回の「TNF- α 」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「TNF- α 」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「トロポニンC」を評価するための説明であり、今回の「TNF- α 」を支持する根拠にはならない。

総合解説：TNF- α は炎症反応の促進に関与する代表的サイトカインである。TNF- α は炎症反応の促進に関与する代表的サイトカインである。

Q116

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：標準

免疫の論点「IL-10」について、「IL-10」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．トロンピンは凝固系酵素である。
- イ．ミオシンは筋収縮に関与するタンパク質である。
- ウ．ペプシンは胃の消化酵素である。
- エ．IL-10は炎症性サイトカイン産生を抑えるなど抗炎症方向の作用をもつ。

答え・4肢解説

正答：エ．IL-10は炎症性サイトカイン産生を抑えるなど抗炎症方向の作用をもつ。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「トロンピン」を評価するための説明であり、今回の「IL-10」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「ミオシン」を評価するための説明であり、今回の「IL-10」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「ペプシン」を評価するための説明であり、今回の「IL-10」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「IL-10」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：IL-10は炎症性サイトカイン産生を抑えるなど抗炎症方向の作用をもつ。IL-10は炎症性サイトカイン産生を抑えるなど抗炎症方向の作用をもつ。

Q117

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：標準

免疫の論点「神経免疫調節」について、「神経系と免疫系の相互作用を介して炎症反応が調節される可能性が研究されている。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．神経—免疫連関を介した炎症・免疫調節は鍼刺激研究の一領域である。
- イ．神経・内分泌・免疫系は相互に影響し合う。
- ウ．鍼は免疫細胞を物理的に置換する施術ではない。
- エ．免疫への生理作用があっても感染対策は必須である。

答え・4肢解説

正答：ア．神経—免疫連関を介した炎症・免疫調節は鍼刺激研究の一領域である。

ア：正しい。この説明が「神経系と免疫系の相互作用を介して炎症反応が調節される可能性が研究されている。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「免疫系は神経系と完全に独立している。」を評価するための説明であり、今回の「神経系と免疫系の相互作用を介して炎症反応が調節される可能性が研究されている。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼刺激は免疫細胞を物理的に直接置換する。」を評価するための説明であり、今回の「神経系と免疫系の相互作用を介して炎症反応が調節される可能性が研究されている。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「免疫作用は感染防止策を不要にする。」を評価するための説明であり、今回の「神経系と免疫系の相互作用を介して炎症反応が調節される可能性が研究されている。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：神経—免疫連関を介した炎症・免疫調節は鍼刺激研究の一領域である。神経—免疫連関を介した炎症・免疫調節は鍼刺激研究の一領域である。

Q118

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：標準

免疫の論点「抗炎症反射」について、「迷走神経—副腎系」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．視覚系はこの抗炎症反射の主要経路として示されていない。
- イ．特定条件のマウス実験では、後肢刺激が迷走神経—副腎系を介して全身性炎症を抑制することが示された。
- ウ．随意運動路だけで説明される反応ではない。
- エ．聴覚系の反射ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．特定条件のマウス実験では、後肢刺激が迷走神経—副腎系を介して全身性炎症を抑制することが示された。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「視神経—網膜系」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経—副腎系」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「迷走神経—副腎系」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「錐体路—骨格筋系だけ」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経—副腎系」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「聴神経—蝸牛系」を評価するための説明であり、今回の「迷走神経—副腎系」を支持する根拠にはならない。

総合解説：特定条件のマウス実験では、後肢刺激が迷走神経—副腎系を介して全身性炎症を抑制することが示された。特定条件のマウス実験では、後肢刺激が迷走神経—副腎系を介して全身性炎症を抑制することが示された。

Q119

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：応用

免疫の論点「条件依存性」について、「刺激部位や強度により動員される自律神経経路が異なり、抗炎症効果も条件依存的になり得る。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．刺激条件による差が報告されている。

イ．免疫調節研究は感染症の標準治療を代替する根拠にはならない。

ウ．基礎研究では体部位・刺激強度に依存した自律神経経路の選択性が示されている。

エ．動物実験から人への外挿には慎重さが必要である。

答え・4肢解説

正答：ウ．基礎研究では体部位・刺激強度に依存した自律神経経路の選択性が示されている。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「どの部位・強度でも同一の免疫反応が保証される。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度により動員される自律神経経路が異なり、抗炎症効果も条件依存的になり得る。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「抗炎症作用があれば感染症治療の代わりになる。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度により動員される自律神経経路が異なり、抗炎症効果も条件依存的になり得る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「刺激部位や強度により動員される自律神経経路が異なり、抗炎症効果も条件依存的になり得る。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「動物実験の結果はそのまま全ての人に適用できる。」を評価するための説明であり、今回の「刺激部位や強度により動員される自律神経経路が異なり、抗炎症効果も条件依存的になり得る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：基礎研究では体部位・刺激強度に依存した自律神経経路の選択性が示されている。基礎研究では体部位・刺激強度に依存した自律神経経路の選択性が示されている。

Q120

3-4 生体反応 > 免疫 | 難易度：応用

免疫の論点「エビデンス解釈」について、次の判断が適切である主な根拠はどれか。

判断：免疫・炎症関連指標への影響が研究されているという意味であり、感染症や免疫疾患の治癒を一律に保証するものではない。

ア．感染症では適切な医学的診断・治療が必要である。

イ．感染防止策は免疫作用の有無に関係なく必要である。

ウ．病態や刺激条件により反応は異なる。

エ．生体反応としての免疫調節と、個別疾患に対する臨床的有効性は区別して評価する必要がある。

答え・4肢解説

正答：エ．生体反応としての免疫調節と、個別疾患に対する臨床的有効性は区別して評価する必要がある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「感染症なら医療機関を受診せず鍼灸だけで治療すべきという意味である。」を評価するための説明であり、今回の「免疫・炎症関連指標への影響が研究されているという意味であり、感染症や免疫疾患の治癒を一律に保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「免疫作用があれば標準予防策は不要という意味である。」を評価するための説明であり、今回の「免疫・炎症関連指標への影響が研究されているという意味であり、感染症や免疫疾患の治癒を一律に保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「あらゆる免疫疾患に同一の刺激条件が有効という意味である。」を評価するための説明であり、今回の「免疫・炎症関連指標への影響が研究されているという意味であり、感染症や免疫疾患の治癒を一律に保証するものではない。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「免疫・炎症関連指標への影響が研究されているという意味であり、感染症や免疫疾患の治癒を一律に保証するものではない。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：生体反応としての免疫調節と、個別疾患に対する臨床的有効性は区別して評価する必要がある。生体反応としての免疫調節と、個別疾患に対する臨床的有効性は区別して評価する必要がある。

Q121

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：基礎

有害事象の論点「定義」について、「因果関係を問わず、治療中または治療後に発生した好ましくない医学的事象である。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．有害事象は施術との因果関係の有無を問わず、治療中または治療後に生じた好ましくない医学的事象をいう。

イ．過失の有無は有害事象の定義条件ではない。

ウ．有害事象は好ましくない事象である。

エ．施術前からの症状すべてを自動的に有害事象とする定義ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．有害事象は施術との因果関係の有無を問わず、治療中または治療後に生じた好ましくない医学的事象をいう。

ア：正しい。この説明が「因果関係を問わず、治療中または治療後に発生した好ましくない医学的事象である。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「施術者の過失が証明された事故だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「因果関係を問わず、治療中または治療後に発生した好ましくない医学的事象である。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者に利益があった事象だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「因果関係を問わず、治療中または治療後に発生した好ましくない医学的事象である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「施術前から存在するすべての症状を自動的に指す。」を評価するための説明であり、今回の「因果関係を問わず、治療中または治療後に発生した好ましくない医学的事象である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：有害事象は施術との因果関係の有無を問わず、治療中または治療後に生じた好ましくない医学的事象をいう。有害事象は施術との因果関係の有無を問わず、治療中または治療後に生じた好ましくない医学的事象をいう。

Q122

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：基礎

有害事象の論点「副作用」について、「施術後の強い倦怠感」が適切とされる根拠はどれか。

ア．鍼の置き忘れは安全管理上の事象であり、副作用という生体反応とは区別される。

イ．ガイドラインでは強い疲労感、倦怠感、過度の眠気、気分不良などを全身性の副作用として挙げている。

ウ．気胸は臓器損傷に関する重大な有害事象である。

エ．埋没鍼は禁忌の施術であり、副作用とは異なる。

答え・4肢解説

正答：イ．ガイドラインでは強い疲労感、倦怠感、過度の眠気、気分不良などを全身性の副作用として挙げている。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「使用済み鍼の置き忘れだけ」を評価するための説明であり、今回の「施術後の強い倦怠感」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「施術後の強い倦怠感」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「胸郭への深刺による気胸だけ」を評価するための説明であり、今回の「施術後の強い倦怠感」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「故意の埋没鍼だけ」を評価するための説明であり、今回の「施術後の強い倦怠感」を支持する根拠にはならない。

総合解説：ガイドラインでは強い疲労感、倦怠感、過度の眠気、気分不良などを全身性の副作用として挙げている。ガイドラインでは強い疲労感、倦怠感、過度の眠気、気分不良などを全身性の副作用として挙げている。

Q123

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「気胸」について、「気胸を疑い、速やかに医療機関を受診させる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．気胸は重篤化し得るため単なる経過観察は不適切である。
- イ．追加刺鍼は損傷を悪化させる危険がある。
- ウ．胸郭周囲への刺鍼後の胸痛・呼吸苦では気胸を疑い、速やかな医療機関受診が必要である。
- エ．呼吸症状がある患者を無評価で帰宅させるべきではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．胸郭周囲への刺鍼後の胸痛・呼吸苦では気胸を疑い、速やかな医療機関受診が必要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「施術効果の一部として経過観察だけにする。」を評価するための説明であり、今回の「気胸を疑い、速やかに医療機関を受診させる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「さらに胸部へ深刺して症状を確認する。」を評価するための説明であり、今回の「気胸を疑い、速やかに医療機関を受診させる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「気胸を疑い、速やかに医療機関を受診させる。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者を一人で帰宅させ、翌週まで待つ。」を評価するための説明であり、今回の「気胸を疑い、速やかに医療機関を受診させる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：胸郭周囲への刺鍼後の胸痛・呼吸苦では気胸を疑い、速やかな医療機関受診が必要である。胸郭周囲への刺鍼後の胸痛・呼吸苦では気胸を疑い、速やかな医療機関受診が必要である。

Q124

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：応用

有害事象の論点「救急搬送」について、「救急搬送を要請する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．安静だけでは緊張性気胸への決定的対応にならない。
- イ．追加施術ではなく救急医療を優先する。
- ウ．重篤化の危険があり院内経過観察だけでは不十分である。
- エ．緊張性気胸は急速に循環・呼吸状態が悪化し得るため、速やかな救急搬送が必要である。

答え・4肢解説

正答：エ．緊張性気胸は急速に循環・呼吸状態が悪化し得るため、速やかな救急搬送が必要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「うつ伏せで30分休ませるだけにする。」を評価するための説明であり、今回の「救急搬送を要請する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「灸を追加して呼吸を整える。」を評価するための説明であり、今回の「救急搬送を要請する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「症状が治まるまで院内で経過を見る。」を評価するための説明であり、今回の「救急搬送を要請する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「救急搬送を要請する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：緊張性気胸は急速に循環・呼吸状態が悪化し得るため、速やかな救急搬送が必要である。緊張性気胸は急速に循環・呼吸状態が悪化し得るため、速やかな救急搬送が必要である。

Q125

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「出血」について、「不必要に太い鍼や粗雑な手技を避け、抜鍼後に必要な圧迫を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．過大な器械的刺激を避け、抜鍼後の圧迫と出血確認を行うことが基本である。
- イ．抜鍼後は出血や皮下出血を確認する。
- ウ．強い揉捏は出血を増やす可能性がある。
- エ．抗凝固薬使用者では出血リスク評価が重要である。

答え・4肢解説

正答：ア．過大な器械的刺激を避け、抜鍼後の圧迫と出血確認を行うことが基本である。

ア：正しい。この説明が「不必要に太い鍼や粗雑な手技を避け、抜鍼後に必要な圧迫を行う。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼後は出血の有無を確認しない。」を評価するための説明であり、今回の「不必要に太い鍼や粗雑な手技を避け、抜鍼後に必要な圧迫を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「出血を増やすため刺鍼部を強く揉む。」を評価するための説明であり、今回の「不必要に太い鍼や粗雑な手技を避け、抜鍼後に必要な圧迫を行う。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「抗凝固薬使用の有無を確認しない。」を評価するための説明であり、今回の「不必要に太い鍼や粗雑な手技を避け、抜鍼後に必要な圧迫を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：過大な器械的刺激を避け、抜鍼後の圧迫と出血確認を行うことが基本である。過大な器械的刺激を避け、抜鍼後の圧迫と出血確認を行うことが基本である。

Q126

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「失神」について、「初回施術で恐怖や緊張が強い場合」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．十分な休息と不安軽減はむしろ予防的に働く。
- イ．初回、強い不安・恐怖、体調不良、虚弱などは脳貧血のリスクを高める。
- ウ．座位は転倒を伴う失神リスクが問題となり、仰臥位の方が一般に安全である。
- エ．必ず起こるものではなく複数の誘因がある。

答え・4肢解説

正答：イ．初回、強い不安・恐怖、体調不良、虚弱などは脳貧血のリスクを高める。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「十分休息し不安がない場合だけ」を評価するための説明であり、今回の「初回施術で恐怖や緊張が強い場合」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「初回施術で恐怖や緊張が強い場合」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「仰臥位で安定している場合だけ」を評価するための説明であり、今回の「初回施術で恐怖や緊張が強い場合」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「刺激を行っていない場合に必ず起こる。」を評価するための説明であり、今回の「初回施術で恐怖や緊張が強い場合」を支持する根拠にはならない。

総合解説：初回、強い不安・恐怖、体調不良、虚弱などは脳貧血のリスクを高める。初回、強い不安・恐怖、体調不良、虚弱などは脳貧血のリスクを高める。

Q127

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「体位」について、「施術を中止して転倒を防ぎ、安全な体位で状態を評価する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．立位は転倒や失神を悪化させる危険がある。
- イ．過剰刺激は自律神経症状を悪化させ得る。
- ウ．脳貧血が疑われる場合は刺激を中止し、転倒防止と全身状態の確認を優先する。
- エ．状態が不安定な患者を一人にすべきではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．脳貧血が疑われる場合は刺激を中止し、転倒防止と全身状態の確認を優先する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「そのまま立位にして歩かせる。」を評価するための説明であり、今回の「施術を中止して転倒を防ぎ、安全な体位で状態を評価する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「刺激を強くして覚醒を促す。」を評価するための説明であり、今回の「施術を中止して転倒を防ぎ、安全な体位で状態を評価する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「施術を中止して転倒を防ぎ、安全な体位で状態を評価する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者を座位のまま一人にする。」を評価するための説明であり、今回の「施術を中止して転倒を防ぎ、安全な体位で状態を評価する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：脳貧血が疑われる場合は刺激を中止し、転倒防止と全身状態の確認を優先する。脳貧血が疑われる場合は刺激を中止し、転倒防止と全身状態の確認を優先する。

Q128

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「洪鍼」について、「強引に抜かず、患者の緊張や筋収縮、鍼の状態を確認して慎重に対応する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．強引な器具操作は折鍼や組織損傷の危険を高める。
- イ．過度な捻転は鍼の絡みや変形を悪化させることがある。
- ウ．筋収縮を伴う運動は抜鍼困難や折鍼の危険を高める。
- エ．抜鍼困難では強引な操作を避け、原因を評価して折鍼や組織損傷を防ぐ。

答え・4肢解説

正答：エ．抜鍼困難では強引な操作を避け、原因を評価して折鍼や組織損傷を防ぐ。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「ペンチで強く引き抜く。」を評価するための説明であり、今回の「強引に抜かず、患者の緊張や筋収縮、鍼の状態を確認して慎重に対応する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼を左右どちらかへ何十回も強く回してから急に抜く。」を評価するための説明であり、今回の「強引に抜かず、患者の緊張や筋収縮、鍼の状態を確認して慎重に対応する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者に関節運動を繰り返させながら強く引く。」を評価するための説明であり、今回の「強引に抜かず、患者の緊張や筋収縮、鍼の状態を確認して慎重に対応する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「強引に抜かず、患者の緊張や筋収縮、鍼の状態を確認して慎重に対応する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：抜鍼困難では強引な操作を避け、原因を評価して折鍼や組織損傷を防ぐ。抜鍼困難では強引な操作を避け、原因を評価して折鍼や組織損傷を防ぐ。

Q129

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：標準

有害事象の論点「折鍼」について、「鍼の異常を事前確認し、必要以上の深刺や粗雑な手技を避ける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．器具点検、適切な深度、患者の体動管理などが折鍼予防に重要である。
- イ．異常のある鍼は使用しない。
- ウ．筋収縮・体動は鍼への外力を増やす。
- エ．鍼を完全に埋没させる操作は抜去困難時の対応を難しくする。

答え・4肢解説

正答：ア．器具点検、適切な深度、患者の体動管理などが折鍼予防に重要である。

ア：正しい。この説明が「鍼の異常を事前確認し、必要以上の深刺や粗雑な手技を避ける。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「曲がった鍼を手で戻して再使用する。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の異常を事前確認し、必要以上の深刺や粗雑な手技を避ける。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「置鍼中に患者へ激しい関節運動をさせる。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の異常を事前確認し、必要以上の深刺や粗雑な手技を避ける。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼根まで完全に埋没させることを標準とする。」を評価するための説明であり、今回の「鍼の異常を事前確認し、必要以上の深刺や粗雑な手技を避ける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：器具点検、適切な深度、患者の体動管理などが折鍼予防に重要である。器具点検、適切な深度、患者の体動管理などが折鍼予防に重要である。

Q130

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：応用

有害事象の論点「神経損傷」について、「神経への過剰刺激を疑い、刺激を中止して鍼位置を再評価する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．異常な神経症状を治療効果として強行すべきではない。
- イ．強い電撃様痛や持続する異常感覚では神経刺激・損傷を疑い、操作を中止して評価する。
- ウ．反復刺激は損傷リスクを高める。
- エ．有害反応は記録し、必要な対応を行う。

答え・4肢解説

正答：イ．強い電撃様痛や持続する異常感覚では神経刺激・損傷を疑い、操作を中止して評価する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「効果的な得気としてさらに深く刺す。」を評価するための説明であり、今回の「神経への過剰刺激を疑い、刺激を中止して鍼位置を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「神経への過剰刺激を疑い、刺激を中止して鍼位置を再評価する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「同じ方向へ雀啄を続ける。」を評価するための説明であり、今回の「神経への過剰刺激を疑い、刺激を中止して鍼位置を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の訴えを記録せず無視する。」を評価するための説明であり、今回の「神経への過剰刺激を疑い、刺激を中止して鍼位置を再評価する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：強い電撃様痛や持続する異常感覚では神経刺激・損傷を疑い、操作を中止して評価する。強い電撃様痛や持続する異常感覚では神経刺激・損傷を疑い、操作を中止して評価する。

Q131

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：応用

有害事象の論点「熱傷」について、「施灸を中止し、熱傷として評価して必要な処置を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．追加加熱は損傷を悪化させる。
- イ．不潔な穿刺は感染リスクを高める。
- ウ．水疱形成は熱傷を示すため、追加熱刺激を中止し適切に評価・処置する。
- エ．皮膚反応を無視した追加施灸は危険である。

答え・4肢解説

正答：ウ．水疱形成は熱傷を示すため、追加熱刺激を中止し適切に評価・処置する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「治療反応としてさらに加熱する。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、熱傷として評価して必要な処置を行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「水疱を不潔な針で破る。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、熱傷として評価して必要な処置を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「施灸を中止し、熱傷として評価して必要な処置を行う。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚状態を確認せず別の灸を重ねる。」を評価するための説明であり、今回の「施灸を中止し、熱傷として評価して必要な処置を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：水疱形成は熱傷を示すため、追加熱刺激を中止し適切に評価・処置する。水疱形成は熱傷を示すため、追加熱刺激を中止し適切に評価・処置する。

Q132

3-5 安全 > 有害事象 | 難易度：応用

有害事象の論点「説明・記録」について、「患者の安全確保を優先し、必要な医療対応、説明、記録、再発防止を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．記録を残さないことは安全管理上不適切である。
- イ．患者安全が最優先である。
- ウ．説明を避けた反復施術はリスクを増大させる。
- エ．有害事象ではまず安全確保と必要な医療対応を行い、その後に説明・記録・再発防止へつなげる。

答え・4肢解説

正答：エ．有害事象ではまず安全確保と必要な医療対応を行い、その後に説明・記録・再発防止へつなげる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「事実を記録せず隠す。」を評価するための説明であり、今回の「患者の安全確保を優先し、必要な医療対応、説明、記録、再発防止を行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「原因究明より施術継続を優先する。」を評価するための説明であり、今回の「患者の安全確保を優先し、必要な医療対応、説明、記録、再発防止を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者への説明を避け、同じ手技を直ちに繰り返す。」を評価するための説明であり、今回の「患者の安全確保を優先し、必要な医療対応、説明、記録、再発防止を行う。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「患者の安全確保を優先し、必要な医療対応、説明、記録、再発防止を行う。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：有害事象ではまず安全確保と必要な医療対応を行い、その後に説明・記録・再発防止へつなげる。有害事象ではまず安全確保と必要な医療対応を行い、その後に説明・記録・再発防止へつなげる。

Q133

3-5 安全 > 感染 | 難易度：基礎

感染の論点「標準予防策」について、「すべての患者の血液・体液には感染性がある可能性を想定して対策する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．感染症の既知・未知にかかわらず血液・体液曝露を想定するのが標準予防策の基本である。

イ．未診断の感染症もあるため全患者を対象とする。

ウ．年齢に関係なく標準予防策を適用する。

エ．微量な血液・体液も感染源となり得る。

答え・4肢解説

正答：ア．感染症の既知・未知にかかわらず血液・体液曝露を想定するのが標準予防策の基本である。

ア：正しい。この説明が「すべての患者の血液・体液には感染性がある可能性を想定して対策する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「感染症と診断された患者だけ対策する。」を評価するための説明であり、今回の「すべての患者の血液・体液には感染性がある可能性を想定して対策する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「若年者には感染対策は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「すべての患者の血液・体液には感染性がある可能性を想定して対策する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「血液が目視できない場合は対策しない。」を評価するための説明であり、今回の「すべての患者の血液・体液には感染性がある可能性を想定して対策する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：感染症の既知・未知にかかわらず血液・体液曝露を想定するのが標準予防策の基本である。感染症の既知・未知にかかわらず血液・体液曝露を想定するのが標準予防策の基本である。

Q134

3-5 安全 > 感染 | 難易度：基礎

感染の論点「手指衛生」について、「刺鍼などの無菌操作の前」が適切とされる根拠はどれか。

ア．患者接触後にも手指衛生が推奨される。

イ．無菌操作前は手指衛生を行うべき重要なタイミングである。

ウ．体液曝露後は重要な手指衛生のタイミングである。

エ．患者ごと・場面ごとに必要なタイミングで行う。

答え・4肢解説

正答：イ．無菌操作前は手指衛生を行うべき重要なタイミングである。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者に触れた後は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼などの無菌操作の前」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「刺鍼などの無菌操作の前」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「体液曝露後は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼などの無菌操作の前」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「1日の診療開始時の1回だけでよい。」を評価するための説明であり、今回の「刺鍼などの無菌操作の前」を支持する根拠にはならない。

総合解説：無菌操作前は手指衛生を行うべき重要なタイミングである。無菌操作前は手指衛生を行うべき重要なタイミングである。

Q135

3-5 安全 > 感染 | 難易度：標準

感染の論点「流水手洗い」について、「石けんと流水で手洗いする。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．目視汚染がある場合、擦式アルコールだけでは不十分なことがある。
- イ．乾拭きだけでは十分な手指衛生にならない。
- ウ．目視できる汚染がある場合は石けんと流水による手洗いが推奨される。
- エ．手袋は手指衛生の代替ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．目視できる汚染がある場合は石けんと流水による手洗いが推奨される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「アルコールを一滴だけ付ければ必ず十分である。」を評価するための説明であり、今回の「石けんと流水で手洗いする。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「乾いたタオルで拭くだけでよい。」を評価するための説明であり、今回の「石けんと流水で手洗いする。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「石けんと流水で手洗いする。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「手袋を上から着ければ洗浄は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「石けんと流水で手洗いする。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：目視できる汚染がある場合は石けんと流水による手洗いが推奨される。目視できる汚染がある場合は石けんと流水による手洗いが推奨される。

Q136

3-5 安全 > 感染 | 難易度：標準

感染の論点「皮膚消毒」について、「鍼施術では施術野を消毒する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．外観だけで微生物汚染は判断できない。
- イ．消毒後の再汚染を避ける。
- ウ．消毒綿は患者間で共用しない。
- エ．鍼施術では施術野の消毒が必要である。

答え・4肢解説

正答：エ．鍼施術では施術野の消毒が必要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚が見た目にきれいなら消毒は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「鍼施術では施術野を消毒する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「消毒後に不潔な手指で刺鍼点を触れてよい。」を評価するための説明であり、今回の「鍼施術では施術野を消毒する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「使用済み消毒綿を複数患者で共用する。」を評価するための説明であり、今回の「鍼施術では施術野を消毒する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「鍼施術では施術野を消毒する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：鍼施術では施術野の消毒が必要である。鍼施術では施術野の消毒が必要である。

Q137

3-5 安全 > 感染 | 難易度：標準

感染の論点「アルコール濃度」について、「消毒用エタノール（76.9～81.4 vol%）」が適切とされる根拠はどれか。

ア．ガイドラインでは消毒用エタノール76.9～81.4 vol%または70 vol%イソプロピルアルコールが推奨される。

イ．低濃度アルコールは消毒効果が低下する。

ウ．水道水だけは施術野消毒薬ではない。

エ．食用油に消毒目的はない。

答え・4肢解説

正答：ア．ガイドラインでは消毒用エタノール76.9～81.4 vol%または70 vol%イソプロピルアルコールが推奨される。

ア：正しい。この説明が「消毒用エタノール（76.9～81.4 vol%）」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「10 vol%エタノール」を評価するための説明であり、今回の「消毒用エタノール（76.9～81.4 vol%）」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「水道水だけ」を評価するための説明であり、今回の「消毒用エタノール（76.9～81.4 vol%）」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「食用油」を評価するための説明であり、今回の「消毒用エタノール（76.9～81.4 vol%）」を支持する根拠にはならない。

総合解説：ガイドラインでは消毒用エタノール76.9～81.4 vol%または70 vol%イソプロピルアルコールが推奨される。ガイドラインでは消毒用エタノール76.9～81.4 vol%または70 vol%イソプロピルアルコールが推奨される。

Q138

3-5 安全 > 感染 | 難易度：標準

感染の論点「PPE」について、「必要に応じて医療用手袋などを使用し、血液への直接接触を避ける。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．使用済み鍼体への直接接触は感染リスクを高める。

イ．血液・体液曝露が予想される場面では適切な個人防護具を使用し、直接接触を避ける。

ウ．医療用手袋は患者ごとに交換する。

エ．少量でも体液曝露後は手指衛生が必要である。

答え・4肢解説

正答：イ．血液・体液曝露が予想される場面では適切な個人防護具を使用し、直接接触を避ける。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「素手で鍼体をつまむことを標準とする。」を評価するための説明であり、今回の「必要に応じて医療用手袋などを使用し、血液への直接接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「必要に応じて医療用手袋などを使用し、血液への直接接触を避ける。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「手袋を患者間で使い回す。」を評価するための説明であり、今回の「必要に応じて医療用手袋などを使用し、血液への直接接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「血液が少量なら手指衛生は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「必要に応じて医療用手袋などを使用し、血液への直接接触を避ける。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：血液・体液曝露が予想される場面では適切な個人防護具を使用し、直接接触を避ける。血液・体液曝露が予想される場面では適切な個人防護具を使用し、直接接触を避ける。

Q139

3-5 安全 > 感染 | 難易度：標準

感染の論点「飛沫感染」について、「患者のマスク着用や適切な距離の確保など、飛沫曝露を減らす対策を行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．鋭利物の廃棄は重要だが、呼吸器飛沫への対策そのものではない。
- イ．飛沫感染では患者との距離やマスクが感染機会の低減に関係する。
- ウ．飛沫感染対策では、患者のマスク着用や距離の確保などにより飛沫への曝露を減らす。
- エ．素手で口鼻を覆う方法は適切な個人防護策ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．飛沫感染対策では、患者のマスク着用や距離の確保などにより飛沫への曝露を減らす。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「使用済み鍼を一般ごみに入れば飛沫対策として十分である。」を評価するための説明であり、今回の「患者のマスク着用や適切な距離の確保など、飛沫曝露を減らす対策を行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「飛沫感染では患者との距離やマスクは関係しない。」を評価するための説明であり、今回の「患者のマスク着用や適切な距離の確保など、飛沫曝露を減らす対策を行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「患者のマスク着用や適切な距離の確保など、飛沫曝露を減らす対策を行う。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「施術者が素手で口鼻を覆えば標準的な対策となる。」を評価するための説明であり、今回の「患者のマスク着用や適切な距離の確保など、飛沫曝露を減らす対策を行う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：飛沫感染対策では、患者のマスク着用や距離の確保などにより飛沫への曝露を減らす。飛沫感染対策では、患者のマスク着用や距離の確保などにより飛沫への曝露を減らす。

Q140

3-5 安全 > 感染 | 難易度：基礎

感染の論点「B型肝炎」について、「B型肝炎ワクチンの接種」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．施術者の職業感染予防としてワクチンが推奨される。
- イ．鍼刺し等の血液曝露時には適切な曝露後対応が必要である。
- ウ．血液はHBVなどの感染経路となる。
- エ．B型肝炎は血液媒介感染症として感染力が強く、施術者へのワクチン接種が推奨される。

答え・4肢解説

正答：エ．B型肝炎は血液媒介感染症として感染力が強く、施術者へのワクチン接種が推奨される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「感染歴を問わずワクチンは避ける。」を評価するための説明であり、今回の「B型肝炎ワクチンの接種」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「鍼刺し後も曝露後対応は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「B型肝炎ワクチンの接種」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血液曝露は感染につながらないと考える。」を評価するための説明であり、今回の「B型肝炎ワクチンの接種」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「B型肝炎ワクチンの接種」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：B型肝炎は血液媒介感染症として感染力が強く、施術者へのワクチン接種が推奨される。B型肝炎は血液媒介感染症として感染力が強く、施術者へのワクチン接種が推奨される。

Q141

3-5 安全 > 感染 | 難易度：応用

感染の論点「免疫低下」について、「施術の適否について医師の判断を仰ぎ、感染防止を特に重視する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．易感染性患者で病態が安定しない場合は、適否について医師の判断を仰ぎ感染対策を徹底する。
- イ．易感染状態では施術後感染症が問題となり得る。
- ウ．感染リスクが高いほど衛生管理を省略してはならない。
- エ．単回使用鍼の再使用は感染対策上不適切である。

答え・4肢解説

正答：ア．易感染性患者で病態が安定しない場合は、適否について医師の判断を仰ぎ感染対策を徹底する。

ア：正しい。この説明が「施術の適否について医師の判断を仰ぎ、感染防止を特に重視する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「感染リスクは鍼灸に関係しないので通常どおり行う。」を評価するための説明であり、今回の「施術の適否について医師の判断を仰ぎ、感染防止を特に重視する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「皮膚消毒を省略して刺激を弱くする。」を評価するための説明であり、今回の「施術の適否について医師の判断を仰ぎ、感染防止を特に重視する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「単回使用鍼を再使用して刺激量を減らす。」を評価するための説明であり、今回の「施術の適否について医師の判断を仰ぎ、感染防止を特に重視する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：易感染性患者で病態が安定しない場合は、適否について医師の判断を仰ぎ感染対策を徹底する。易感染性患者で病態が安定しない場合は、適否について医師の判断を仰ぎ感染対策を徹底する。

Q142

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：基礎

禁忌の論点「緊急事態」について、「鍼灸施術を行わず、救急対応と医療施設での処置を優先する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．ガイドラインでは緊急事態への応急処置として鍼灸施術を行ってはならない。
- イ．意識障害や呼吸停止などの緊急事態では鍼灸施術を行わず、救急医療を最優先する。
- ウ．医療対応を遅らせてはならない。
- エ．強刺激は緊急疾患の標準対応ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．意識障害や呼吸停止などの緊急事態では鍼灸施術を行わず、救急医療を最優先する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「応急処置として鍼だけを行う。」を評価するための説明であり、今回の「鍼灸施術を行わず、救急対応と医療施設での処置を優先する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「鍼灸施術を行わず、救急対応と医療施設での処置を優先する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「施術を開始してから改善しなければ連絡する。」を評価するための説明であり、今回の「鍼灸施術を行わず、救急対応と医療施設での処置を優先する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「症状が重いほど強刺激を加える。」を評価するための説明であり、今回の「鍼灸施術を行わず、救急対応と医療施設での処置を優先する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：意識障害や呼吸停止などの緊急事態では鍼灸施術を行わず、救急医療を最優先する。意識障害や呼吸停止などの緊急事態では鍼灸施術を行わず、救急医療を最優先する。

Q143

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：基礎

禁忌の論点「バイタルサイン」について、「施術を控え、速やかな医療機関での評価を勧める。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．原因評価を遅らせる可能性がある。
- イ．異常所見は記録し適切に対応する。
- ウ．意識、体温、脈拍、血圧、呼吸状態などに異常がある場合は施術を行うべきでなく、医療評価を優先する。
- エ．患者希望だけで医学的危険性を無視できない。

答え・4肢解説

正答：ウ．意識、体温、脈拍、血圧、呼吸状態などに異常がある場合は施術を行うべきでなく、医療評価を優先する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「鍼灸で正常化するまで施術する。」を評価するための説明であり、今回の「施術を控え、速やかな医療機関での評価を勧める。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「異常値を記録せず通常どおり行う。」を評価するための説明であり、今回の「施術を控え、速やかな医療機関での評価を勧める。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「施術を控え、速やかな医療機関での評価を勧める。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「本人が希望すれば重篤度に関係なく必ず行う。」を評価するための説明であり、今回の「施術を控え、速やかな医療機関での評価を勧める。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：意識、体温、脈拍、血圧、呼吸状態などに異常がある場合は施術を行うべきでなく、医療評価を優先する。意識、体温、脈拍、血圧、呼吸状態などに異常がある場合は施術を行うべきでなく、医療評価を優先する。

Q144

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：標準

禁忌の論点「埋没鍼」について、「体内に故意に鍼を残す埋没鍼療法」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．適切な単回使用鍼は安全管理上推奨される。
- イ．手指衛生は感染対策の基本である。
- ウ．説明と同意は患者安全と権利確保に重要である。
- エ．埋没鍼は神経・臓器・血管損傷やMRI等への影響があるため、行ってはならない。

答え・4肢解説

正答：エ．埋没鍼は神経・臓器・血管損傷やMRI等への影響があるため、行ってはならない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「滅菌済み単回使用毫鍼を適切に使用する施術」を評価するための説明であり、今回の「体内に故意に鍼を残す埋没鍼療法」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必要な手指衛生を行う施術」を評価するための説明であり、今回の「体内に故意に鍼を残す埋没鍼療法」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「患者に説明と同意を得て行う施術」を評価するための説明であり、今回の「体内に故意に鍼を残す埋没鍼療法」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「体内に故意に鍼を残す埋没鍼療法」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：埋没鍼は神経・臓器・血管損傷やMRI等への影響があるため、行ってはならない。埋没鍼は神経・臓器・血管損傷やMRI等への影響があるため、行ってはならない。

Q145

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：標準

禁忌の論点「臓器・神経への刺鍼」について、「機能を損なうおそれがあるため、内臓や神経そのものを意図的に刺鍼しない。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．内臓・神経への意図的刺鍼は重大な損傷を招くため禁じられる。
- イ．臓器損傷は重篤な有害事象になり得る。
- ウ．神経損傷を意図する刺鍼は安全原則に反する。
- エ．危険深度を超える刺鍼は症状の有無にかかわらず避ける。

答え・4肢解説

正答：ア．内臓・神経への意図的刺鍼は重大な損傷を招くため禁じられる。

ア：正しい。この説明が「機能を損なうおそれがあるため、内臓や神経そのものを意図的に刺鍼しない。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「治療目的なら内臓を直接刺してよい。」を評価するための説明であり、今回の「機能を損なうおそれがあるため、内臓や神経そのものを意図的に刺鍼しない。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「神経を貫けば強い効果が得られるので推奨される。」を評価するための説明であり、今回の「機能を損なうおそれがあるため、内臓や神経そのものを意図的に刺鍼しない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「危険深度を超えても症状がなければ問題ない。」を評価するための説明であり、今回の「機能を損なうおそれがあるため、内臓や神経そのものを意図的に刺鍼しない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：内臓・神経への意図的刺鍼は重大な損傷を招くため禁じられる。内臓・神経への意図的刺鍼は重大な損傷を招くため禁じられる。

Q146

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：標準

禁忌の論点「妊娠」について、「十分な説明と同意のうえで強刺激を避け、特に腹部周囲への施術に注意する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．強刺激は避けるべきとされる。
- イ．妊婦では安全性に不明点があり、強刺激を避け、特に腹部周囲には特段の注意が必要である。
- ウ．一律の完全禁忌ではなく、注意すべき場合として扱われる。
- エ．腹部周囲は特に慎重な対応が必要である。

答え・4肢解説

正答：イ．妊婦では安全性に不明点があり、強刺激を避け、特に腹部周囲には特段の注意が必要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「妊娠中は刺激量を通常より必ず強くする。」を評価するための説明であり、今回の「十分な説明と同意のうえで強刺激を避け、特に腹部周囲への施術に注意する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「十分な説明と同意のうえで強刺激を避け、特に腹部周囲への施術に注意する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「妊婦はどの条件でも完全に禁忌である。」を評価するための説明であり、今回の「十分な説明と同意のうえで強刺激を避け、特に腹部周囲への施術に注意する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腹部周囲は妊娠週数に関係なく深刺を標準とする。」を評価するための説明であり、今回の「十分な説明と同意のうえで強刺激を避け、特に腹部周囲への施術に注意する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：妊婦では安全性に不明点があり、強刺激を避け、特に腹部周囲には特段の注意が必要である。妊婦では安全性に不明点があり、強刺激を避け、特に腹部周囲には特段の注意が必要である。

Q147

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：標準

禁忌の論点「炎症・感染部位」について、「局所への施術を避け、必要に応じ医療機関での精査を勧める。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．感染部位への侵襲は悪化や感染拡大のリスクとなる。
- イ．感染が疑われる部位への強い熱刺激は適切でない。
- ウ．局所感染や外傷が疑われる場合は局所施術を避け、経過不良なら医療評価を勧める。
- エ．悪化時は施術を中断し医学的評価を優先する。

答え・4肢解説

正答：ウ．局所感染や外傷が疑われる場合は局所施術を避け、経過不良なら医療評価を勧める。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「腫れた中心へ強く刺激する。」を評価するための説明であり、今回の「局所への施術を避け、必要に応じ医療機関での精査を勧める。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「感染を疑っても灸で強く加熱する。」を評価するための説明であり、今回の「局所への施術を避け、必要に応じ医療機関での精査を勧める。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「局所への施術を避け、必要に応じ医療機関での精査を勧める。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「経過が悪化しても施術を継続する。」を評価するための説明であり、今回の「局所への施術を避け、必要に応じ医療機関での精査を勧める。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：局所感染や外傷が疑われる場合は局所施術を避け、経過不良なら医療評価を勧める。局所感染や外傷が疑われる場合は局所施術を避け、経過不良なら医療評価を勧める。

Q148

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：標準

禁忌の論点「抗凝固療法」について、「出血リスクを評価し、必要に応じ刺激法や部位を調整して慎重に行う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．薬剤情報は安全な適否判断に重要である。
- イ．不要な深刺は出血・血腫リスクを高める。
- ウ．抜鍼後の止血確認・圧迫は重要である。
- エ．抗凝固療法中は出血リスクに注意し、侵襲度や部位、止血確認を含め慎重に判断する。

答え・4肢解説

正答：エ．抗凝固療法中は出血リスクに注意し、侵襲度や部位、止血確認を含め慎重に判断する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「抗凝固薬の使用は問診しない。」を評価するための説明であり、今回の「出血リスクを評価し、必要に応じ刺激法や部位を調整して慎重に行う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「深刺を多用して出血の有無を確認する。」を評価するための説明であり、今回の「出血リスクを評価し、必要に応じ刺激法や部位を調整して慎重に行う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「抜鍼後の圧迫は行わない。」を評価するための説明であり、今回の「出血リスクを評価し、必要に応じ刺激法や部位を調整して慎重に行う。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「出血リスクを評価し、必要に応じ刺激法や部位を調整して慎重に行う。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：抗凝固療法中は出血リスクに注意し、侵襲度や部位、止血確認を含め慎重に判断する。抗凝固療法中は出血リスクに注意し、侵襲度や部位、止血確認を含め慎重に判断する。

Q149

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：基礎

禁忌の論点「発熱」について、「原因疾患の特定と治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧める。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．発熱時は原因疾患の診断・治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧めることが望ましい。

イ．高熱は重篤疾患の徴候となり得て強刺激の適応ではない。

ウ．感染症などの鑑別が必要である。

エ．適切な医学的評価を遅らせてはならない。

答え・4肢解説

正答：ア．発熱時は原因疾患の診断・治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧めることが望ましい。

ア：正しい。この説明が「原因疾患の特定と治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧める。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「発熱が高いほど強い鍼刺激を行う。」を評価するための説明であり、今回の「原因疾患の特定と治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧める。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「感染症の可能性を考慮せず通常施術する。」を評価するための説明であり、今回の「原因疾患の特定と治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧める。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「医療機関受診を遅らせて数日間鍼灸だけで様子を見る。」を評価するための説明であり、今回の「原因疾患の特定と治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧める。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：発熱時は原因疾患の診断・治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧めることが望ましい。発熱時は原因疾患の診断・治療を優先し、施術を控えて医療機関受診を勧めることが望ましい。

Q150

3-5 安全 > 禁忌 | 難易度：応用

禁忌の論点「植込み型医療機器」について、「誤作動のおそれがあるため行ってはならない。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．出力を弱くしても禁忌が解除されるわけではない。

イ．ペースメーカーや除細動器など植込み型医療機器使用者への鍼通電は、誤作動リスクから行ってはならない。

ウ．部位だけで電磁的影響を完全に除外できない。

エ．医療機器の安全情報を無視してはならない。

答え・4肢解説

正答：イ．ペースメーカーや除細動器など植込み型医療機器使用者への鍼通電は、誤作動リスクから行ってはならない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「刺激を弱くすれば必ず安全なので実施する。」を評価するための説明であり、今回の「誤作動のおそれがあるため行ってはならない。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「誤作動のおそれがあるため行ってはならない。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「胸部を避ければどの装置でも必ず安全である。」を評価するための説明であり、今回の「誤作動のおそれがあるため行ってはならない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の同意だけあれば機器情報を確認せず実施できる。」を評価するための説明であり、今回の「誤作動のおそれがあるため行ってはならない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：ペースメーカーや除細動器など植込み型医療機器使用者への鍼通電は、誤作動リスクから行ってはならない。ペースメーカーや除細動器など植込み型医療機器使用者への鍼通電は、誤作動リスクから行ってはならない。